『フィリップ善良公のいとも小さき祈祷書』
―祈りと彩飾写本の相互作用に関する試論

Praying with the Tiny Prayer Book of Philip the Good: An Essay on the Interactive Transformation of an Illuminated Manuscript

黒　岩　三　恵
KUROIWA Mie

Key words: 写本彩飾、ブルゴーニュ公国、フィリップ善良公、15 世紀
Manuscript illumination, Duchy of Burgundy, Philip the Good, 15th century

Abstract

Philip the Good, Duke of Burgundy, is known to have owned numerous paraliturgical manuscripts. That he not only made new books, but also actively edited old ones inherited from his forebears, has been interpreted as an act of artistic patronage or one of many instances of his use of art as a tool to transmit his political agenda. In examining a well-worn and relatively under-studied prayer book kept at the Staatsbibliothek in Munich, this paper attempts to reconstruct the different stages of the making of the manuscript owned and used by the Duke. Through the analyses, not only codicological, stylistic, iconographical but also those based on observations of additional inscriptions, smear, dirt, finger prints and other actual traces of use of the prayer book, the author tries to shed a new light on the relation between the book and the reader, on how the prayer book's texts and images shaped the act of praying of the Duke who, in turn, made a number of amendments to his book in order to strengthen his own faith.

1．はじめに

中世末期からルネサンスにかけての西洋における美術作品と観者とのコミュニケーションのあり方を、聖堂装飾プログラムと典礼、寄進者と祭壇装飾やステンドグラス等の寄進記念物、記念物と記憶等のように、美術作品を霊的な行為や注文主・所有者との関りから考察する方法は、定石化して久しく、美術史研究の伝統的な手法に数えられる。彩飾写本の研究では、注文主や所有者はパトロンと呼ばれて芸術庇護の観点から挿絵画家や著述家に対して彼らの関与を研究することが 19 世紀以来行われてきた。時禱書に代表される祈祷書写本類は、しばしば壮麗な彩飾を伴うために格好の研究対象であり続けている。そして、種々の寄進者像が端的に示すとおり祈りに欠かせないアイテムである祈祷書について、まさに祈るという行為、祈りに関わるものとしての画像とその意味の生成について、近年関心が高まっている（Rudy, 2010, 2016, 2017）。本稿も、手に取ることができ、頁を繰りながら彩飾に目を投じるのと同時に祈りが唱えられる、感覚を動員する祈りの行為性と祈祷書の機能に注目して、祈祷書写本の成り立ちと使われ方に注目しようとする試みである。

昨年の論考で、オランダ国立図書館蔵『フィリップ善良公の時禱書』（ms. 76 F 2。以下、ハーグ写本と略記）におけるトマス・アクィナス作詞祈祷文 “Concede michi” の挿絵〈キリストの洗礼〉（ジャン・ル＝タヴェルニエ工房）の特異な主題選択の問題について、前後する祈祷文とその挿絵とも関連させながら考察を行った（黒岩、2020）。その際、ハーグ写本のユニークな図像プログラムがフィリップ善良公にとって重要な意味を持っていたことを補強する新確認の資料として、バイエルン州立図書館蔵『フィリップ善良公のいとも小さき祈祷書』（ms.Gall. 40。以下、ミュンヘン写本と略記）に触れ、その概要を紹介した。本稿では、ネーデルラント南部地域の彩飾祈祷書写本における祈祷行為と視覚性の関係について考察する研究課題の一環として、前稿では副次的な扱いだったミュンヘン写本に焦点を充て、詳細な分析、考察を行うこととする。

ミュンヘン写本の意義と本稿での問題点は以下のとおりである。当写本は所有者の重要性にも関わらず、新味の乏しい地味な印象ゆえか、彩飾の様式、挿絵の図像プログラム、彩飾とテクストの関係、頁レイアウト等の、写本彩飾研究の基礎的研究も待たれる状況にある。最近、写本の「読まれ方」や「使われ方」すなわちその用途や機能についてテクスト・ジャンルに拘らず広義の社会的・文化的コンテクストに照らした種々の研究がなされてきている[1)]。とりわけ、個人が使用する時禱書を含む私的祈祷書類は、13 世紀以降、個人の私的な祈祷への需要に呼応するように教会の典礼写本類から派生したが、不可分の要素である彩飾とその展開を考察するにあたり、読み手、使い手としての注文主の重要性は近年ますます重要視されている。完成後の写本への編集、書き込み、挿絵への加筆や削除についても従来から分析の対象となってきたが、図書館の「考古学的」な層構造を蔵書、使い手の変化とともに書籍への書き込みから意味的な変遷を見出す新たな関心と手法も登場している（Poirters, 2016）。21 世紀の最初の 10 年ほどは、15 世紀から 16 世紀初頭までの写本彩飾に関する重要な展覧会に代表されるように、ネーデルラントの写本彩飾

の研究に視野の広い展開が見られた時期であった。本年、ヴァン＝エイク兄弟《ゲント祭壇画》の大掛かりな修復が完了したことで、改めて 15 世紀フランドル美術における写実性への関心が高まっている（Martens, Till–Holger, Dumolyn, De Smet & Van Dam, 2020）。写本彩飾の研究にとって、15・16 世紀のフランドル絵画の輝くばかりの緻密な表現性に改めて立ち戻って新鮮な関心を寄せるタイミングを示しているように感じられる。また、数年来マロウ等によって提起されてきた 15 世紀絵画におけるイメージの意味と写実性の複合的な関係について（Marrow, 2005, 2007[1]）、さらなる考察を推進する意味でも、ミュンヘン写本が提示する読者と写本の関係は考察に値すると判断される。

ネーデルラント南部の写本彩飾に関しては、歴代ブルゴーニュ公の蔵書）への関心を中核として底厚い先行研究の蓄積があることは周知のとおりである（Bousmanne & Van Hoorebeek, 2000）。フィリップ善良公の彩飾写本に関する個別研究では、善良公が所有した典礼写本、パラ典礼写本の研究も 19 世紀以来断続的に行われてきた。『フィリップ善良公の聖務日課書』（Leroquais, 1929）や『善良公の時禱書』（ハーグ写本）[2] に関する諸研究では、善良公に焦点が当たる場合、注文主、芸術庇護者として主として美的な局面におけるパトロンとしての側面が強調される傾向が続いた。

以下で詳細に検討するように、ミュンヘン写本は、レイアウト、彩飾ともに洗練と独創性を欠く。しかし、詳細に吟味すると、ブシコーの画家に発してベッドフォードの画家とその後継者等が継承する図像伝統の広がりと、ロベール・カンパンやヤン・ヴァン・エイク由来の図像との併存が注目される（図 I, III , 3）。パリの 15 世紀中葉の彩飾と同時代のネーデルラント南部の絵画における相互的な影響関係の具体的な一証拠である。祈祷文の選択と配列、上記の《キリストの洗礼》を典型とする挿絵主題の選択にフィリップ善良公自らの意向が反映されていると推定できるばかりか、祈祷書の随所に残る手指の皮脂汚れすなわち手垢の痕跡から、日常的に愛用されていたことが強く示唆される。また、巻頭をはじめとする写本の空白頁の計 6 か所に、計 10 種の祈祷文が補われている（図 1, 8–9）。この後補については末尾の【附録 2】に翻刻と解説をまとめた。後補テクストは、書体と内容から当写本の読まれ方、利用のされ方、すなわちフィリップ善良公の日常の具体的で親密な信仰の実践についての手がかりを提供する点で重要だと評価できる。

なお、本稿は、主としてバイエルン州立図書館のデジタルライブラリー：IIIF Sammlungen der Bayerischen Staatsbibliothek 上の『善良公のいとも小さき祈祷書』の電子化ファクシミリの閲覧に基づく[3]。本稿の挿図に加え、左記電子ファクシミリ版も参照されたい。今後、ドイツを中心とするヨーロッパの防疫状況を考慮しながら近い将来実地調査による知見を補い、2021 年度に刊行する報告書で、より包括的な知見を明らかにする予定である。

2．『フィリップ善良公のいとも小さき祈祷書』（ミュンヘン写本）の概要

2. 1.　写本学的知見

本稿で採用する『いとも小さき祈祷書』という呼称は、ヴァン＝ビューレンのそれを継承した（Van Buren, 2000, pp. 66–67 および 2002, p. 1396）。この写本をフィリップ善良公に帰属する根拠は、巻頭の善良公の大紋章と 4 点の挿絵に描かれる善良公像である（図VI）[4)]。現存する善良公の蔵書目録の記述からミュンヘン写本に一致する項目は現時点では確認できていない[5)]。バイエルン州立図書館デジタルライブラリーの電子ファクシミリ版の画面に付属する物差しの目盛りから判断すると、頁寸法は約 100 × 62 ミリであり、時禱書としては標準的である[6)]。ただし、挿絵の上端や折丁最終頁のレクラムが切り落とされているところから判断して、当初は高さ、幅ともに 10 から 15 ミリ程度大きかったと推定される。テクスト欄は、赤色インクで頁あたり 12 行の罫線が引かれる。その寸法は、電子ファクシミリ付属の物差しによれば、約 60 × 40 ミリ弱である。12 行の祈祷文テクストと彩飾によって彩られたページは、スマートホンのディスプレイで見るよりもさらに小さく名刺大サイズだ。電子版が原寸大表示ではないことには注意したい。

【附録 1】のとおり、電子版の画像から折丁の綴じ糸の状態、祈祷文の区切り、挿絵の挿入の状況を手がかりに可能な範囲で折丁構成を推定した。その結果、一折丁 8 葉で構成されるクワルテニヨンが基本的に用いられていることがわかる。また、キリストや聖母への祈り、連祷、詩篇、聖人請願等の重要な祈祷文のまとまりは、折丁を改めて写字される。折丁の最初の葉表に挿絵が配置されるケースがあるのは、左記の写字慣習によって説明できる。また、祈祷文の筆写後、1 から 4 頁（1/2 から 2 葉）程度の罫線のみ引かれた空白頁が折丁を閉じるケースも少なくない[7)]。以上から、ミュンヘン写本はフランス、パリで制作された写本の特徴を備えていることがわかる。他方、ネーデルラントの写本は多い、折丁第 1 葉レクトまたは綴込みの零葉レクトは何も描かずに空白とし、ヴェルソ面に挿絵を描く方式が用いられているのかどうかは、電子ファクシミリ版では判断が不可能である。実地調査の課題としたい。なお、拙論（黒岩、2020）では、ミュンヘン写本について 1440 年代半ばのフランドル地方で制作されたとするヴァン＝ビューレンの推定にほぼ同意した（Van Buren, 2000）。この点については、第 3 節で詳述する。また、バイエルン州立図書館デジタルライブラリーでは、制作地不明（“s.l.”）としつつ、フランスが制作地との立場をとっている[8)]。制作地については本節の最後で触れたい。

2. 2.　書体

ミュンヘン写本の書体の特徴は以下のごとくである。巻頭のと f. 1 から f. 3 までは、後述のとおり後補のテクストが筆写されている[9)]。オリジナルの祈祷文テクストは、f. 4 から記載される。F. 8 から f. 19v までを占める典礼暦を含め、書体は角が取れて輪郭が甘いゴティカ・テクストゥアリス・セミカドラータである（図 II–IV, 6–7）。もとより聖堂で使用する典礼写本類は、15 世紀

末に至ってなお伝統的に用いられてきたゴティカ・テクストゥアリス・カドラータの格調高い秩序を継承した。他方、私的信仰に供する祈祷文写本類では、比較的カジュアルなセミ・カドラータ書体を用いて、公的な写本との相違を視覚化してきた。15 世紀半ばになるとパリを中心とするフランスでは、パラ典礼書でも流麗なバタルド書体への転換が起こる（図 10）[10]。写実性を高め複雑化する彩飾との相乗効果によって、1450 年代には貴顕らが注文した最も豪華で洗練された彩飾写本群では主流となっていく[11]。しかし、注意したいのは 15 世紀後半のバタルド書体の流行中でも、パラ典礼写本においてセミ・カドラータ書体が廃れることがないことである[12]。他方、フランスで制作された写本の書体との識別は容易ではないが、所有者や彩飾からネーデルラント南部で制作されたと推定可能な写本では、当地での俗語写本でのバタルド書体の普及状況とは対照的に、パラ典礼写本ではセミ・カドラータ書体がより堅持される傾向が一般的に看取される。

このように、ミュンヘン写本が、フィリップ善良公の写本にしては古臭い様式という印象を与えるのは、少なくとも書体に関して言えば誤解に過ぎないことがわかる。その一方、書体のみから制作地がフランスかネーデルラント南部かは判断するのは困難で、ヴァン＝ビューレン説、バイエルン州立図書館説、いずれとも判じがたい。

2. 3. 彩飾

ミュンヘン写本の彩飾は、4 人または 5 人の彩飾画家が担当し、全頁大挿絵、四分の三頁大挿絵、図像入り彩飾頭文字、彩飾頭文字、アカンサス文を主体とする草花文欄外装飾の 5 要素により構成される。

2. 3. 1. 全頁大挿絵

全頁大挿絵は、ミュンヘン写本の扉絵である f. 3v〈キリストの聖顔〉の 1 点のみである。アーチ形の枠型の挿絵を、金の葉、実を散らした唐草文とアカンサス文の組み合わせの中に、雛菊と西洋苧環を配した欄外装飾が四方から取り巻く（図 I）。金泥を用いて線描された光背や長衣の襟ぐりの刺繍、頭髪の細部、顔のモデリングは、摩滅して細部が判然としない。ページ表面が褐色に変色していることからも埃等による傷みがはっきりと認められる。このため、以下第 3 節で述べるように扉絵の画家の同定は困難である。金銀細工のような光背や面長な胸像の特徴から、失われたヤン・ヴァン・エイク作《キリストの聖顔》に遡る、写本挿絵でも多くの作例が残る模作の一つに数えられる[13]。

2. 3. 2. 四分の三頁大挿絵

計 35 点を数え、ウィレム・ヴレラント（工房）を含む少なくとも 4 人の画家によって描かれた（図 II–VII , 2–8）。重要な祈祷文の冒頭に置かれ、枠型は扉絵と共通するアーチ形である。画家たちの分担について、オンラインの電子ファクシミリの閲覧による折丁構成の暫定的な推定を土台として、現時点で考え得る状況を概観する。

最も多くの挿絵を描いているのは、ヴァン・ビューレンが指摘するように（Van Buren, 2000, 66–67）、パリ 15 世紀前半のフランコ・フラマン様式の一つベッドフォード様式に属するが、後述する様式的特徴を持つ逸名画家である。ヴァン＝ビューレンは、ベルギー王立図書館所蔵のフィリップ善良公の『エノー年代記』第 1 巻に関する上記 2000 年の論考で、ドレッセ、ドガールらの論文を発展させ、同年代記とミュンヘン写本の彩飾を関連づけている（Delaissé, 1955, pp. 24–30, Dogaer, 1987, pp. 63–67）。ドレッセ、ヴァン＝ビューレンの論文では、『エノー年代記』に主眼が置かれてミュンヘン写本の扱いは副次的である。したがって、彩飾画家らの様式的な定義が曖昧な点を含めて、現地調査を踏まえた再検討が課題として残る。本稿では便宜上、「いとも小さき祈祷書の第 1 の画家」ないし「第 1 の画家」と命名する。制作した挿絵の主題は、〈悪魔を退治する大天使ミカエル〉、〈図像入り彩飾頭文字 “S”：祈祷書を広げた祈祷台の前に跪拝し、挿絵の大天使ミカエルを見上げるフィリップ善良公〉（以上、f. 22）（図 II）、〈受胎告知〉（f. 38）（図 3）、〈聖母のエリザベス訪問〉（f. 42）（図 2）、〈降誕〉（f. 43v）、〈授乳する聖母〉（f. 46）、〈謙譲の聖母〉（f. 48）、〈聖霊降臨〉（f. 49）、〈神に祈る老ダヴィデ王〉（f. 54）、〈恩寵の座〉（f. 58）（図 3）、〈キリストの洗礼〉（f. 65v）、〈聖バルバラ〉（f. 70v）（図 4）、〈磔刑のキリストに向かって祈るフィリップ善良公〉（f. 72v）、〈キリストの復活〉（f. 111）、〈最後の審判〉（f. 121v）、〈祈るダヴィデ王に剣を掲げる天使〉（f. 127）、〈聖体奉挙を見守るフィリップ善良公〉（f. 133v）（図 VI）、〈聖体拝領する善良公〉（f. 141）、〈祭壇前で祈祷する善良公〉（f. 144）、〈神に祝福される天上のマリア〉（f. 150）である【附録 1】。このミュンヘン写本第 1 の画家は、ヴァン＝ビューレンが「いとも小さき祈祷書の画家」と命名した『エノー年代記』第 1 巻の ff. 20, 24v の挿絵を描いた彩飾画家とともに、透視図法的に同画家と区別されるが近似した様式的特徴を持つとされる「年代記の画家」（ドレッセの暫定的な命名をヴァン＝ビューレンも継承）とも、特に顔貌を中心とする人物表現によって関連すると考えられる（Delaissé, 1955, Van Buren, 2000）。また、ff. 72v, 133v, 141 の 3 点の挿絵にみるフィリップ善良公像は、顔貌の写実性が際立つ。ヴァン＝ビューレンはジラール・ド・ルシヨンの画家（ドルー・ジャンに同定可能か）による加筆を示唆している（Van Buren, 2000, p. 71, n. 18）。第 1 の画家は、第 3 節で後述するように、ブシコー、ベッドフォードらパリ彩飾の伝統と、ヤン・ヴァン・エイク、フレマールの画家らフランドル絵画をモデルとする図像の混合が特徴である。

第 1 の画家と様式が極めて近いのが、やはり逸名の彩飾画家である（図 IV, 5）。比較的に稚拙な様式によって識別されるヴァン＝ビューレンが「ウルススの画家」The Ursus Master と命名した画家とおよそ一致すると推定されるこの画家については、本稿では便宜上、呼称は「いとも小さき祈祷書の第 2 の画家」または「第 2 の画家」とする。第 2 の画家による挿絵は、〈キリストの変容〉（f. 76）、〈エルサレム入城〉（f. 78）、〈最後の晩餐〉（f. 81）（図IV）、〈ゲツセマネの祈り〉（f. 83v）、〈キリストの逮捕〉（f. 85）、〈アンナス（またはピラト）の前に引き出されるキリスト〉（f. 37v）、〈キリストの笞打ち〉（f. 89v）、〈十字架の道行き〉（f. 91v）、〈磔刑、気絶する聖母〉（f. 44）（図 5）、〈十字架降下〉（f. 100v）、〈キリストの埋葬〉（f. 100v）、〈キリストの埋葬〉

（f. 108v）、〈キリストの昇天〉（f. 116v）である。

第三に、第 1、第 2 の画家に様式的に近い画家が、写本の中ほどの 3 点の挿絵すなわち〈恩寵の座と聖人たち〉（f. 158v）、〈キリストの笞打ち〉（f. 161v）と〈磔刑〉（f. 164v）を担当した（図Ⅴ）。本稿で第 3 の画家と命名するこの画家は、顔貌は第 1、第 2 の画家と類似する一方、衣服の襞に膨らみが少なく垂直に落ちる表現や、丸顔よりは面長な傾向の顔貌、抑制された明暗のある色彩が特徴的である。

第四に、ウィレム・ヴレラントは、巻末に近い 4 点の挿絵を担当した（Bousmanne, 1997, pp. 276–277）。〈聖母の戴冠〉（f. 173v）、〈最後の審判〉（f. 240）（図Ⅶ）、〈聖堂内の葬礼〉（f. 270）、〈無原罪の御宿りの聖母子像〉（f. 315v）である。ただ、〈聖母戴冠〉と〈聖堂内の葬礼〉は、ヴレランに特徴的な顔貌は明確には認識できない。玉座、祭壇、天蓋、アーチが交差する聖堂の構造、淡緑色のぼかしによる草地の描写では、パレットや入り組んだ空間表現にヴレラントの特徴が認められる。直筆とは考えにくいが工房帰属と推定して差し支えないだろう。

最後に、巻頭の〈キリストの聖顔〉は（図Ⅰ）、上記の 3 人の画家のいずれとも異なる。保存状態不良のため、様式的な特徴が把握し難いが、最も腕の立つ画家の可能性が高い。本稿では、「聖顔の画家」と呼ぶことにする。画家の同定の問題に関しては、以下、第 3 節でも取り上げる。

2. 3. 3. 二次装飾：彩飾頭文のヒエラルキーと欄外飾飾

頭文字を青や赤で彩色し、その内外や周辺に赤、青、白、金を用いた植物文で充填する彩飾頭文字は、罫線 4 行、2 行、1 行の高さを持つ 3 サイズが採用されている（図 II–VI、2–6）。

4 行高の彩飾頭文字は、上述の四分の三頁大挿絵の下に配置され、聖人請願や個別の祈祷文の冒頭を示す。ミュンヘン写本では、頭文字を額縁に見立てた図像入りのものは、記述の〈聖ミカエル〉の挿絵の下に配置された〈ミカエルを見上げるフィリップ善良公〉、〈磔刑〉の下の〈キリストの衣を賭ける兵士〉の 2 点に限られる（図 II, 5）。4 行高の彩飾頭文字は、矩形の金地の枠によって挿絵のアーチ形の細枠と連結する。前述のとおり、挿絵の周囲の欄外余白は植物文と稀にドロルリーによって装飾されるが、頭文字から直接伸び出る棒状装飾は描かれない[14]。もとは棒状装飾だったものが、理解されぬまま借用されたと思しき頁も若干数えられる[15]。

2 行高の頭文字は、アンティフォナ、詩篇、祈祷文等のまとまりを持つ複数の祈祷文の各々の冒頭に使用される（図 6）。

1 行高の頭文字は、詩篇の聖句や連祷の行頭に使用される。彩飾頭文字は、頭文字上に白で細線装飾を簡素に施し、サイズによる装飾デザインの違いは基本的にはないばかりではなく、文字の読みやすさと装飾的な視覚効果を高めるための工夫が見られない、伝統となった彩飾頭文字の画法の機械的な反復を特徴とする。

挿絵が描かれる頁では、テクスト欄の周囲の欄外余白に植物を中心とするマージナリアが描かれる（図 I–VII , 2–5）。切れ込みのある、葉の表が青の濃淡、裏が黄色に赤の陰影をつけたアカンサス文が、余白の四隅や上述の棒状装飾の先端などにバランスよく配される。半ば図案化された

菫、苧環、撫子、野薔薇、雛菊、苺などの野草が、時に腹が膨らんだ鉢に植えられて、のど側を除く三方の余白に配置される。最後に、アカンサス文や野草の間をつなぐように、金の丸形や紡錘形の実や三角形の葉、装飾化された青や淡紅色の小花をところどころにつけた黒く長い細線の茎をもつ唐草文がリズミカルな直線を描いて充填する。

ウィレム・ヴレラントが挿絵を描いた 4 頁では、繁茂する唐草文の間に、王冠をかぶり、ヴィオルを弾く下半身が青魚の尾のドロルリー（f. 173v）、ドラゴンに尾を噛みつかれる白鳥（f. 240）（図Ⅶ）、黒いつば広帽をかぶり、赤髭を蓄えた男の頭部と尾の長い猛禽の身体をもった怪物（f. 270）、ブロンドの髪を結った若い女の頭部と二本足のドラゴンの身体をもった怪物（f. 315v）が、前小口のちょうど半分の高さの位置に描かれている[16]。

欄外余白の植物文は、挿絵が描かれた頁以外でも見られる。祈祷文等の冒頭に用いられる 2 行高の彩飾頭文字から左余白に向かって、縦がテクスト欄と等しい約 50 ミリ、幅が約 17 ミリの栞状に、野草と唐草文を組み合わせた装飾図案があしらわれる。ミュンヘン写本の中でも巻の前半、第一の画家が担当した挿絵のある折丁に比較的集中して描かれている（図 6）。この栞状装飾が描かれる基準は不明である。証拠はないが、キリストや聖母など重要性の高さを視覚化する意図とともに、全頭文字への装飾が行き届かないまま、二次装飾が未完である可能性も考えられる。また、栞状余白装飾を伴う 2 行高彩飾頭文字に、金泥をぼかしながらモデリングを施した植物文が描き加えられる場合もある（f. 105v など）[17]。

最後に、巻末に近い、f. 351 から始まる折丁以降、3 行高の彩飾頭文字の色彩と意匠の変更に言及する（ff. 351, 358v, 366v）。頭文字のサイズと、随伴する赤色標題の内容から、挿絵の挿入に準ずる祈祷文のまとまりの冒頭に配置されていると判明する。まず目を惹くのは、青みがかった色調である。同様に、頭文字の外枠から四方に向かって、黒インクを使って痙攣するような曲線を描きながら伸び広がる植物文にも目が行く。巻末の 3 折丁に至って二次装飾プログラムが変更されたのは、f. 351 以降に新たな祈祷文、すなわち「都詣での歌」15 編の収録を視覚化する必要があった一方、挿絵のスペースをレイアウトに確保する代わりにテクスト欄から左方にはみ出す大型の頭文字のためのスペースが確保されたためか。余白に装飾をふんだんに描くことで、頭文字を際立たせる必要が乗じたと考えられる一方、別の理由を想定することも可能である。つまり、祈祷書・時禱書写本を構成する祈祷文が、折丁ごとに注文に先立ってあらかじめ筆記しておく制作システムの存在が推定される。3 行高の頭文字の採用は、半完成品ですでに決定されていたレイアウトへの対応とも考えられる。しかし、半完成品を採用したと仮定した場合でも、以下に見るように、彩飾頭文字と左余白に繁茂する植物文を描いたのはベッドフォード様式の流れをくむ画家たちの一人だと考えられる。

3．彩飾の位置づけ：源泉と伝播

すでに触れたように（黒岩、2020）、『フィリップ善良公のいとも小さき祈祷書』（ミュンヘン写

本）の画家は、15 世紀前半にパリで隆盛をみたブシコー様式から、イギリス占領下のベッドフォード様式へ連なり、当世のフランドルの油彩画からも着想を得たポスト・ヤン・ヴァン・エイクの歴史的な潮流を反映している。今日のフランス北部ル・ノールまたはオ＝ド＝フランス地域圏は、ブルゴーニュ公国の一部でありながらフランドルよりもフランス的な様式によって特徴づけられていた（Avril & Reynaud, 1993, pp. 71–97）。ミュンヘン写本に関しては、先行研究との関りから正確な位置づけは未だなされていない。しかし、端的に西洋美術の主導がパリからネーデルラント南部へと移行する、まさにその一過程を証拠立てるミュンヘン写本の彩飾について、もう少し詳しく検討しよう。

前景にクローズアップ気味に人物像を配し、上部が半円形のアーチ形の枠型を生かして垂直に遠方へ退く風景を描く構図は（図 2）、1410 年頃のブシコー様式で定式化したものである（図 11）。ブシコーの画家の活動については、多数現存する写本作例から、単に大勢の弟子や助手を抱える工房を営んでいたばかりでなく、同時代の多彩なフランコ・フラマン様式も超える広範な影響等の観点から、正確にその実態を把握するための研究上の努力が続けられている[18]。ついで、アザンクールの戦い後のイギリスによるパリ占領期（1424–1435）に、ベッドフォードの画家とその流派が、ブシコーの画家と様式に替わる広範な活動と影響力を発揮する状況となる[19]。ベッドフォードの画家の流派についてミースが 1960 年代後半に「トレンド」と呼んで考察して以来（Meiss, 1968, 1974, pp. 366–368 他）、ベッドフォード様式についても、工房の構成員、各構成員の活動を確定する努力が 1990 年代以降に本格化している（Reynaud, 1993, 1999; Villela–Petit, 2003, Reynolds, 2006, 2007, Hoffman, 2007, König, 2007）。その際、ベッドフォードの画家を文献上確認できる皇太子ルイ・ド・ギュイエンヌのお抱え彩飾画家だったアンスラン・ド・アーグノーと同定する仮説を再提起しながら、画家とつながりのある多様な様式の盛衰について、トレンドなる定義が曖昧な用語を退け、ベッドフォード工房の存在を仮定することが、個々の彩飾画家メンバーを見極める前提となっている。ベッドフォード工房の際立った特徴は、1435 年前後にシャルル 7 世の軍勢によるパリ奪還と摂政ジョン・オヴ・ランカスターの死亡をきっかけとするかのようにベッドフォードの画家自身の活動が終了し[20]、後継者たちの活動が拠点パリとともに地理的な広がりを見せることである。その結果、パリ中心の伝統に加え、フレマールの画家やヤン・ヴァン・エイク等フランドルの画家たちからの影響や借用が推進されることで、ベッドフォード工房ないし様式の質的な変容が促進されてゆく。ミュンヘン写本の第 1、第 2、第 3 の画家は、パリ写本彩飾の伝統性とフランドル絵画の革新性の融合という歴史的文脈の中に位置づけられることは、これから見るとおりベッドフォード工房の後継者の作例との比較によって明らかである。

ベッドフォードの画家の命名源となった 1430 年頃制作の『ベッドフォードの時禱書』（大英図書館、BL Add.MS 18850）を筆頭に[21]、フィリップ善良公が存命だった 1460 年代までに制作されたベッドフォード工房の現存する作例をミュンヘン写本と比較した結果、スペンサー（Spencer, 1965）、ついでミース（Meiss, 1968）によって「ベッドフォードの第一の共同経営者」と命名されたのち、今日では代表作の所有者に因んで「デュノワの画家」の通称で知られる画家の作風に

最も近いと判断できる[22]。さらに、デュノワの画家の次世代の同僚で、代表作に因みジャン・ロラン 2 世の画家（Spencer, 1963, p. 277; Avril & Reynaud, 1993, p. 38 ）の通称を持つ画家からの影響も認められる。しかし、注意したいのは、上記のベッドフォード系の画家たちによる代表的な時禱書は、比較的サイズが大きい中辞典程度の判型を持つ、机上版の祈祷書写本だという点である。名刺サイズのポケット版祈祷書であるミュンヘン写本は、サイズゆえの制約が大きいことは心に留めておくべきだろう。実際、ミュンヘン写本の挿絵のうち、第 1、第 2、第 3 の画家によるものの中から、人物像の顔貌がわずかでもベッドフォード様式の特徴を備えていると認識できるものはない。このことは、ミュンヘン写本の 3 人の画家が、広義のベッドフォード工房の直属の構成員と考えるのが難しいことを示唆するが、比較対象のサイズの違いを考慮すると、慎重な判断を要する。

以上を踏まえたうえで、まず、デュノワの画家の代表的な時禱書と比較しよう。まず、通称の由来となった『デュノワの時禱書』（大英図書館、BL Yates Thompson MS 3）である[23]。デュノワとは、フィリップ善良公の父ジャン無畏公の下手人により 1407 年に暗殺されたオルレアン公ルイ 1 世の庶子デュノワ伯ジャンである。1429 年のオルレアン解放に軍功を挙げた優れた武人ジャン・ド・デュノワが、1439 年に王室侍従長に就任したのを機に採用した紋章が描き込まれていることを手掛かりとして、同年を『デュノワ時禱書』の最も早い制作年代とし、その後 1450 年頃までに制作されたと考えられている。月暦活動図の図像や人物像の衣裳などからは、依然ベッドフォードの画家やさらに古い世代のブシコーの画家やランブール兄弟ら 1410 年代から 20 年代のフランコ・フラマン様式の作風が濃厚である。ミュンヘン写本とは違いの方がより強く印象づけられるが、淫欲の寓意像がまとう毛皮で縁取りをした V 字形に切れ込んだ襟のドレスは（図 10）[24]、ミュンヘン写本で、トマス・アクィナスの祈祷文に続く聖バルバラの請願の挿絵に描かれたものに類似する（図 4）。アーチ形枠の挿絵が描かれた頁とともにテクストのみの頁の欄外余白にも植物文が大きくうねるような曲線を用いて描かれ、旺盛な生命力が充溢し、ベッドフォード工房の趣向を凝らした作風と連なる一方、ミュンヘン写本の欄外装飾のそっけない趣とは印象が大きく異なる。だが、青と黄のアカンサス葉、菫、撫子、苺、野薔薇などの野草を配し、隙間を金の丸い実をつけた唐草文で埋める装飾法は、両写本で基本的に同じだと考えてよい。同様に、欄外余白に描かれる鉢植えの草花のモティーフも、ミュンヘン写本と類似したデザインを持っている。さらに、ミュンヘン写本の巻末 3 折丁で採用された、彩飾頭文字から左欄外に多数の茎を伸ばし金の葉と実、空想的な花を散らした唐草文からなる装飾は、『デュノワ時禱書』でも用いられている（f. 20 等）。

だが、『デュノワ時禱書』で注目されるのは、挿絵中に明らかに 1430 年代のブリュッセル、トゥルネー、ブリュージュで相次いで制作されていた、フレマールの画家やヤン・ヴァン・エイク等の傑作からの借用が見られることである。悪徳の寓意を描く f. 162 の挿絵が、明らかに《ロランの聖母子》（1430 年代後半，ルーヴル美術館）からテラス式庭園と川を挟んだ眺望を借用しているのが顕著な例である。また、ミュンヘン写本とのつながりでは、フレマールの画家が考案し

たとされる、手足と右脇の出血する傷を観者に提示しつつ、玉座に座す父なる神の膝に力なく斜めに身体をもたせかける子イエスを配する、対角線構図の恩寵の座図像の借用がより重要である（図 3）[25]。『デュノワの時禱書』と同時代の『パリ使用式時禱書』（1445 年頃。BnF Lat. 1176）におけるデュノワの画家によるフレマール的な恩寵の座は、フランス写本彩飾における最も早い作例と考えられており、以降、下で紹介する『デ＝ジュルサン時禱書』や『コエティヴィ時禱書』などデュノワの画家の他の作例に見られるだけではなく、1450 年代から 60 年代の後期ベッドフォード様式を中心とするフランスの写本に普及していくことになる（図 14）[26]。

デュノワの画家は、百年戦争の情勢がフランス側に優位になった 1430 年代後半以降、シャルル 7 世の宮廷から顧客を獲得することに腐心した。シャルル 7 世の宰相を務めたギヨム・ジュヴネル＝デ＝ジュルサンが所有した『デ＝ジュルサン時禱書』（フランス国立図書館、BnF NAL3226）は、所有者の要望を色濃く反映したカスタマイズされた欄外装飾を特色とし、彩飾の完成度は高い（図 13）[27]。グリザイユに近い、白を基調とする衣裳を中心に巧みな空気遠近法による起伏のある自然景観の緻密な描写は、ミュンヘン写本では到底見られないものである。しかし、立ち姿の聖母の手で持ち上げられたドレスの裾や、床や地面に座した人物の外套や長衣の衣文は、ミュンヘン写本の第 1 の画家の描くものと形状や陰影表現が近い。また、基本的な構図が共通する挿絵主題が指摘できる。既述の〈恩寵の座〉に加え、〈磔刑〉、〈聖霊降臨〉、〈聖母の戴冠〉、〈受胎告知〉等では、絵画空間、室内のしつらい、人物の配置、服飾のディテール、衣文の形状や流れ、陰影の処理法、特に白色に淡紫色や淡青色の陰影を組み合わせる、いわば印象主義的な色彩感覚にデュノワの画家から派生したモデルの介在を感じさせる。

シャルル 7 世に重用されたブルターニュの貴族プリジャン・ド・コエティヴィ 4 世が所有した『コエティヴィ時禱書』（ダブリン、チェスター・ビーティ・コレクション、W.Ms. 82）では、欄外装飾の野草や唐草文の配置デザインがミュンヘン写本により近い[28]。F. 77 の挿絵〈神に祈るダヴィデ王〉では、跪拝するダヴィデのマントが肩から背を覆いながら足元に落ちていく時の垂直な襞と足元でたわみながら折りたたまれる角ばった衣文が、ミュンヘン写本の同主題の挿絵に似る。また、f. 237〈授乳する聖母〉では、乳児キリストの肢体、マリアのポーズ、彼女がまとう衣服の襞の流れがミュンヘン写本の同主題と類似する。同様に、大天使ミカエルと、踏みしだかれる悪魔の身振りは、討伐されるのがドラゴンではない点も含めて、同系統のモデルに依拠するものだと考えられる[29]。

注文者が不明な、パリ使用式時禱書（大英図書館、BL Egerton MS, 2019）は、ベッドフォード工房が輩出したミュンヘン黄金伝説の画家を主体に[30]、デュノワの画家、ソールスベリ聖務日課書の聖ステファノの画家（様式）の 3 画家（または工房）により 1440 から 50 年頃に彩飾がなされた[31]。セミ・カドラータ書体による書体と、挿絵の周囲の植物装飾の中に副次的な物語場面を組み込む彩飾のレイアウト等、ベッドフォードの画家を忠実に踏襲する作風は、保守的である（図 16）。鉢植えを含む野草と金の実をつける唐草文を組み合わせるおなじみの欄外装飾の他に、テクスト欄と欄外余白との境界に、金箔を貼った地に赤と青の植物を反復させる棹状の装飾が随所

に見られる（f. 157v など）。ミュンヘン写本の同様の装飾の源泉の一つはベッドフォード工房にあるとみてよい。F. 203 には、鮮やかに彩色された熾天使に囲まれたフレマール型の〈恩寵の座〉が描かれ、右脇の傷に肘を曲げて手を添えるキリストのポーズや父なる神の髭や頭髪は、ミュンヘン写本の同主題（f. 58）と類似する。

F. 94〈磔刑〉は、パリ、フランコ・フラマン様式の写本や、ヤン・ヴァン・エイクが複数制作した同主題を換骨奪胎して繰り返し描かれた主題である（図 5）。前景左で両腕を広げ気味にだらりとたらし、後ろざまに倒れんとする聖母、中央のキリストと左右の盗賊たち、右中景寄りに白馬に騎乗しキリストを見る百卒長等、挿絵の構成人物のポーズ、衣裳、彩色などにおいて、最も近いのは、ベッドフォード工房で、デュノワの画家より 10 年ほど遅れて登場したジャン・ロラン 2 世の画家による『ジャン・ロランのミサ典書』の挿絵である（リヨン市立図書館、Lyon BM ms. 517, f. 183v）（図 15）[32]。面長でやや眠たげな上瞼に丸い瞳に、ジャン・ロランの画家の様式との関連が認められる。ミュンヘン写本 f. 111〈聖墳墓の 3 人のマリア、復活したキリスト〉は、遠近を利用し、通常は二つの場面に分けるキリスト復活の主題を一つに統合した挿絵である。前景の兵士のぎこちない四肢の表現などに手本となる挿絵を辛くも模倣した形跡が認められる。同一構図の先行作例は確認するに至っていないが、女たちの被るヴェール、天使の長衣、キリストのマントのような白布に淡紫色で陰影をつける方法は、デュノワの画家からジャン・ロランの画家の挿絵の特徴の一つである。

加えて、ミュンヘン写本の挿絵の少なくないものに、ヤン・ヴァン・エイクらフランドル画家の遠景の市街地の眺望の間接的な影響も見るべきだろう。すでにブシコーの画家が遠景の山上などに建造物を描いていた（図 11）。その伝統は、ベッドフォード工房の画家たちへも継承されているが、デュノワの画家がヤン・ヴァン・エイクの眺望を模倣した例から知れるとおり、地平線に沿って連なる遠景の都市の眺望は、ネーデルラントの都市景観を反映すると見る方が自然である。

以上のように、ミュンヘン写本ではブシコーの画家まで図像源泉を遡れるものを含めて、1440 年代から 50 年代のベッドフォード工房の第 2 世代の彩飾画家たちの残した彩飾とのつながりが認められる。言及したデュノワの画家、ミュンヘン黄金伝説の画家、一世代若手のジャン・ロランの画家の活動期と対照させると、『フィリップ善良公のいとも小さき祈祷書』の制作年代は、1440 年代後半を遡ることはないと推定できる。上述のとおりヴァン＝ビューレンはミュンヘン写本の彩飾をフィリップ善良公の『エノー年代記』第 1 巻を彩飾した画家たちと関連づけた（pp. 5–6）。同年代記の俗語訳の完成が 1446 年、筆写されたテクストが善良公に提出されたのが 1448 年であることは、年代記の彩飾画家たちの活動期間の手がかりとなろう（Bousmanne & Delcourt, 2011, p. 177）。ヴァン＝ビューレンは、ミュンヘン写本に描かれているフィリップ善良公の顔貌の険しさに注目して 1445 年頃と推定するが（Van Buren, 2000, p. 67）、本稿では 1450 年前後と考えたい。上記の 1445 年では、『デュノワ時禱書』、『コエティヴィ時禱書』、『ジュヴネル＝デ＝ジュルサン時禱書』と同時か、先行する年代となるからである。繰り返しになるが、ヴァン＝ビ

ューレンは、ミュンヘン写本におけるフィリップ善良公像の頭部が、ドルー・ジャンと同定が提唱され、早くからジラール・ド・ルシヨンの画家と呼ばれてきた彩飾画家の筆によると推定されることを指摘している（Van Buren 前掲書）。ドルー・ジャンの同定問題については決着がついていないが（Clark, 2011）、パリで生を受け、1430 年代に訓練を受けたのち、1448 年から 54 年にかけて善良公専属の彩飾画家としてブリュッセルで既存写本への補筆や新たな彩飾を業務とした画家である（Clark 前掲書 p. 188）。1450 年代中葉に、ミュンヘン写本にも補筆をしたと考えることも可能だろう。

ミュンヘン写本第 1、第 2、第 3 の画家は、ベッドフォード様式との密接なつながりからブースマンが推定するようにフランス人画家と考えられる（Bousmanne, 1997, p. 276）。他方、ドレッセ、ヴァン＝ビューレンが『エノー年代記』の挿絵画家をジャン・マンセルの画家の様式と関連づける見地を提示し、リールまたはトゥルネーを制作地の候補として挙げていることや、フレマールの画家やヤン・ヴァン・エイクを手本とした図像が複数存在することからブリュッセルやブリュージュも制作地として考えられることは、吟味する価値があるように思われる。特に、1420 年代にイングランドによるパリ征服を機として同市の写本彩飾マーケットが崩壊し、彩飾画家の離散後およそ四半世紀が経過した状況については、さらに緻密な調査と分析が必要となろう。

ウィレム・ヴレラントがミュンヘン写本に参画していることも 1450 年以降の年代を示唆する（Bousmanne, 1997, Bousmanne & Delcourt, 2011）。ヴレラントは、1449 年の文書に最古の記録が残る。1450 年には故郷ユトレヒトにいたことがわかっており、その後、ブリュージュへ移転した。1454 年に同地の彩飾画家たちが加盟する聖ヨハネ同信会に登録、2 年後の 56 年にブリュージュ市民の身分を獲得している。1450 年代に制作されたと考えられる祈祷書類の作例には、ルーアンを中心に活動したファストルフの画家を引き継いだ『ローマ使用式時禱書』（アルスナル図書館、ms. 575、1450–1455 年頃）[33]、ヤン・ヴァン・エイクの影響が強い画家と彩飾した『スランガトゥク時禱書』（ゲッティ美術館、MS Ludwig IX 7、1450 年代）[34] が属する。その後、1460 年代初頭には男女の弟子を抱えていたようである。1460 年代は、多作な時期にあたるが、『アレンベルク時禱書』（ゲッティ美術館、MS Ludwig IX 8、1460 年代初頭）[35]、『レオノール・デ＝ラ＝ベガ時禱書』（スペイン国立図書館、MS Madr. N.Vit. 24–2、1465 年頃）[36] がある。第 2 節で述べたとおり、ミュンヘン写本のウィレム・ヴレランに帰属される挿絵・欄外装飾は、工房作と考えられる。ブシコー、ベッドフォード両工房と同じようにウィレム・ヴレラント様式の雑多なまでの広がりは、画家自身とともに彼の工房の定義が論争の的である[37]。ミュンヘン写本の制作年代を画家や工房の様式的展開の比較から単純な類推することは困難なうえ誤解を招きかねない。そこでまず文書に依拠すれば、ヴレラントが工房を運営していたのが確実なのは 1460 年代である。上述の時禱書の彩飾を比較すると、挿絵の人物像、風景要素の様式や、欄外余白のアカンサス葉、野草などの装飾モティーフは、表現の定型が確立した 1460 年代の方が、ヴレラントがミュンヘン写本を彩飾した年代として妥当ではないかと推定できる。

こう見てくると、独創性が乏しい第 1 の画家等がデュノワの画家他ベッドフォード工房の第 2

世代の画家等の影響下に彩飾を行ったのが、ヴァン＝ビューレンが主張するように 1440 年代半ばから末、あるいは 1450 年前後だと推定が可能な一方、1450 年代以前の年代は、ウィレム・ヴレラントの活動とは齟齬をきたすといえる。ヴレラントが未完の部分を 1460 年代に入って完成させたと推定することで、ようやく制作年代の整合性が保たれるのである。さきに、暫定的に聖顔の画家の作とした巻頭扉絵にも立ち戻りたい（図 I）。以下、第 4 節で詳述するとおり、扉絵の保存状態の悪さから断定は困難であるが、光背、胸像のプロポーション、顔貌の特徴から、ウィレム・ヴレラントが描いた〈キリストの聖顔〉との類似が指摘できる。特にニューヨーク、モーガン・ライブラリ所蔵の 1460 年頃におそらくブリュージュで制作された『ローマ使用式時禱書』（M. 387）の〈サルヴァトール・ムンディ〉（f. 321）は、ヴレラントがミュンヘン写本の扉絵を描いたことの証拠とはならないが、比較分析の対象たりうる。この重要な主題は、ヴレラント級以上の腕の立つ画家が手掛けたと考えるべきだろう。より多くの比較作例を確認することを含めた実地調査を待って詳しく分析を行いたい。

4．フィリップ善良公の“介入”：後補テクストと写本の使われ方

第 3 節最後でまとめた『フィリップ善良公のいとも小さき祈祷書』（ミュンヘン写本）の彩飾の制作年代は、以下で検討する同写本の空白の頁を活用して書き込まれた後補テクストの問題とも関わっている。聖書や時禱書は、一家に代々伝えられ、あらゆる家族史や家族の記念に関係する事項が記録される私的な歴史遺産でもあった。そして、新しい所有者の手に渡るたびごとに蔵書名、新所有者が日頃唱える祈祷が追加されるのが慣習でもあった。ミュンヘン写本の後補は、そんな慣習とも関わってくる。

ミュンヘン写本では、本稿末尾の【附録 2】にまとめたように、巻頭[38]、巻末[39]、折丁の空白頁[40]、既存の祈祷文の訂正[41] がなされている。

4. 1. 後補：書体と内容

本節では、上記の後補の書体と内容を概観し、それぞれがいつ、誰によって加筆されたのかを推定する[42]。次節で、これらの後補がフィリップ善良公の日常の祈祷とどう関わっているのか、逆に言えば、善良公の霊的な要求がどのように写本を改変していると考えられるのか、考察するための予備的なプロセスである。

ミュンヘン写本がゴティカ・テクストゥアリス・セミカドラータ書体で筆記されていることは既に述べた（図 II–VII, 2–7）。これに対して、計 8 箇所の後補は、インク色の違いとともに草書的なゴティカ・クルシヴァないしバスタルダ書体である（図 1、8–11）。

まず、巻頭 ff. 1–3 の部分である（図 1）。ミュンヘン写本は、各ページ下隅が手指の皮脂で黒ずみ、歴史を通じて愛読されたことがうかがえ[43]、殊に巻頭ではページ全体の汚れが著しい。しかし、f. 1 に 2 行分のインデントが 2 箇所、f. 2 に 1 箇所、f. 2v には、1 行分のインデントが空白

として残されているところから、2 行高ないしは 1 行高の彩飾頭文字を入れる予定だったと知れる[45]。Ff. 1–3 は、同じ写字生の筆跡と考えられ、以下の特徴を持つ。小文字 b は、アセンダが曲線を伴わず垂直で、小文字 l も多くが同様である。小文字 d は、アセンダが左に傾く。小文字 g は、あたかも小文字 y に横線を書き足したかのように三画で書かれる。小文字 s は、語末では近代の筆記体の z のディセンダを大きく左上にはね上げたような形をとる。小文字の v は、左側を長く誇張して書く。

この書体は、善良公に仕えた秘書官、写字生の中では、小文字 d のアセンダの湾曲など相違点もあるが、ブリュージュを活動拠点としたダヴィッド・オベールが上述の小文字 b, g, l, v を含め類似点がある（図 16）[46]。他の写字生の例としてジョルジュ・シャストラン著『いと誉れ高き聖母マリアの賛歌』の一写本も近い[47]。書体の細かな分類についてなお慎重な検討を要する点を考慮に入れても、巻頭の後補はフィリップ善良公の時代のもの、すなわち善良公の命で追加されたものと推定できる。

巻頭後補の内容は、どのようなものだろうか。1、2 行高の彩飾頭文字を含むページ・レイアウトは、聖人請願のものと一致する。【附録 2】でまとめたとおり、聖バルバラの請願、聖ブラジウスの請願である。

ミュンヘン写本の中ほどに、折丁の空白に筆写された後補は、書体、内容ともに多様な様相を呈する。まず、巻頭に収録されるキリストの聖顔の祈祷の折丁の後半に当たる ff. 6v–7v は、書体の特徴が ff. 1–3 と一致し、同時期の筆記と推定される。聖クィンティヌスの請願が、同様に彩飾頭文字のスペースを空白に残す聖人請願のレイアウトで記載されている。ついで、典礼暦の後の余白頁（ff. 20–21v）の頁の一つに、前後に空白の頁を残しながら、詩篇 143 に由来する祈祷文が記載される。黒みが比較的強いインク色や、角ばった草書体で、小文字 g、l、r の形状や、小文字 s の斜めではなく直立させるような文字の角度などから、ff. 6v–7v や巻頭 ff. 1–3 とは別の写字生によると考えられる（図 8）。書体の年代推定は容易ではないが、やはりフィリップ善良公の存命中、1450 年代から 1460 年代前半の間と推定可能である。詩篇 143 は、少年ダヴィデがゴリアテに対戦するにあたって唱えたとされ、聖務日課においては、木曜日または金曜日の晩課にうたわれた。この詩篇のみが孤立して候補として記載されている理由や目的は不明である。最後に、ff. 349v–350 に追加された、聖トマス・アクィナスの請願について検討する（図 9）。書体は、既に述べた 2 例の後補とは異なっている。それが太いペン先の形状によるものなのか判然としないが、総じて垂直な字画が際立ち、f、g、l、q 等の小文字のアセンダやディセンダが細くなりながら曲線を描くことが少ない。類似の書体は未確認であるが、15 世紀後半の書体とみて誤りではないのではないか。トマス請願は、フィリップ豪胆公が作らせ、孫の善良公が相続した『フィリップ豪胆公の大時禱書』（フィッツウィリアム美術館、ms. 3–1954）、f. 249v に収録されているトマスの請願の式文と若干の単語の異同を除き、一致する[48]。

続いて、巻末の余白頁に（ff. 375–379v）追加された、計 7 編の祈祷文を検討しよう。Ff. 375 から 377v 上半分までの比較的大きな文字で写字された箇所は、巻頭（ff. 1–3）と ff. 6v–7v と同

一の筆跡だと判断できる。同頁下半分以降は、文字サイズが小さくなり、筆記を速めたかのようなスピード感が対照的である。しかし、よく観察すると、f. 379 までは同一筆跡だと考えられる。記載されている祈祷文は、古くに遡る俗人のための追悼祈祷文、（フランス、セーヌ・エ・マルヌ県の）モーの聖フィアクリス、リエージュ司教聖ユベルトゥス、聖ゲオルギウスの 3 聖人各々の請願が記載されている【附録 2】。最後の頁である、f. 379v には、希釈した褐色インクを用いて二行を一連として四連から成る祈祷文が記載される。小文字の f、g、r の書体から新たな写字生によると考えられる。第 1 連から第 4 連は、まとめて一つの祈祷文を構成しているわけではなく、複数の聖務日課から 4 編の祝祷のみを抜粋したもののようである。

最後に、ミュンヘン写本の祈祷文中に校正の結果、修正がなされた箇所が二つある。最初の写本制作の過程で、筆写し忘れた詩句を追加したものと考えられる（ff. 143v, 342v）。

4. 2.　後補の時期と目的

前パラグラフで概観したように、後補部分の書体は、1450 年から 60 年の間にネーデルラントで用いられていた書体と類似する。そうだとすれば、フィリップ善良公がミュンヘン写本の実用性を向上させようとして入れさせた可能性が高いように思われる。

追加テクストの中では、聖人請願が大半を占める。ミュンヘン写本にもともと収録されている聖人請願は、ローマ使用式に則り、使徒ら古代の殉教者を多く数える[49]。追加されたバルバラ、ブラジウス、フィアクリス、フベルトゥスは、ネーデルラントでローカルな崇敬を集めたか、地元出身の聖人である。ゲオルギウスとトマス・アクィナスは左記の分類には該当しないが、歴史研究者等による先行研究から説明が可能である。シュネルブによれば、善良公は、十字軍への強い意欲に見られるように、騎士道の理念を公国の柱と見做していたことから、特に軍人聖人であるゲオルギウスとミカエルを崇敬していた（Schnerb, 2005, p. 1332）。ゲオルギウス請願を補ったのは善良公の個人的な崇敬から容易に理解されよう。トマス・アクィナスについては、既に拙論で、秘書官ジャン・ミエロに訳出させた古代思想家たちによる道徳論集の末尾に、トマス・アクィナス作詞の祈祷文 “Concede michi” を追加させた点に注目した（黒岩、2020）。上記のシュネルブによれば、善良公とドミニコ会との密接な関係は、カペー王朝本流からヴァロワ朝を経て祖父フィリップ豪胆公へ伝わる、いわば家訓の継承として説明されている。とりわけトマス・アクィナス崇敬は、祖父の代以来三代続く伝統としてトマスの祝日 3 月 7 日には、家訓にしたがいドミニコ会士から選んだ善良公専属の聴罪司祭へ、生前のトマスの好物であったヤツメウナギを贈る習わしがあったほどである（Schnerb, 2005, p. 1333）。Ff. 65v–70 に、祈祷文 “Concede michi” を収録し、巻末余白にトマス請願を補う要請は、歴代ブルゴーニュ公の伝統から説明できることになる。ここで、1455 年頃に制作されたジャン・ミエロ筆写、ジャン・ル＝タヴェルニエ挿絵のハーグ写本では、祈祷文 “Concede michi” もトマス・アクィナスの請願も挿絵付きで収録されていることを想起したい。

さて、今後さらに研究する必要があると考えられるのが聖バルバラのケースである。前稿（黒

岩、2020）で既述のとおり、ハーグ写本と同様にミュンヘン写本でもバルバラの聖人請願は、他の聖人請願から離れて収録されている。しかし、挿絵も添えて請願の式文を収録しながら、なお後補を巻頭の空白頁に加える理由は何か。15 世紀のネーデルランドでは、聖女ゆかりの聖堂[50]、礼拝堂、同信会が示すように[51]、聖バルバラの信仰が特に盛んであった。このことは、フランスの公共図書館が所蔵する典礼・パラ典礼写本を調査したルロケが早くから指摘している（Leroquais, 1932–34）。今後さらに詳細な調査が待たれるが、14 世紀後半以降の盛んなバルバラ崇敬を反映して、聖女の聖務日課や請願の式文や祈祷文が多数残っている。ミュンヘン写本に戻ると、聖バルバラの請願では、誤ってか聖カタリナの請願式文が筆写されているので、修正したと考え得る。しかしそれ以上に、聖バルバラへの崇敬の真の目的と関わっていると考えることもできる。巻頭に筆写されている、後補の聖バルバラへの祈祷文では、単に聖女の徳を賛美し神へのとりなしを祈願する以上に、聖女からの加護を請願する内容となっているのが特徴である。【附録 2】の脚注で指摘したとおり、後補となったバルバラの請願式文はケルン、カルトッジョ会系ザンクト・バルバラ修道院伝の 15 世紀の祈祷書写本の例が知られている。いずれにせよ、聖女の伝記に依拠しつつ、戦での負傷、雷や砲弾からの身の安全、突然死からの保護、臨終の際の聖餐への参与を聖女に要請する内容である点で、祈祷者（すなわち善良公）の切実な要求が伝わってくる内容である。

4. 3　ミュンヘン写本の「手垢」：どう読まれ、どう使われたのか？

『フィリップ善良公のいとも小さき祈祷書』（ミュンヘン写本）は、見開き時の左下と右下の小口に近い部分が褐色に変色している。開かれた祈祷書を両手で持った時の親指の位置だろう。頁をめくっただけならば、左ページ（葉のヴェルソ）がここまで汚れるはずがないからである。どのフォリオにも褐色の変色が見られ、ミュンヘン写本の使用頻度がうかがえる。同写本がブルゴーニュ家の文書史料には確認できないことから、善良公の死後の来歴については分かっていない。したがって、後世の所有者がつけた汚れである可能性が残るが、上述の後補テクストが善良公時代の筆跡と考え得ることを踏まえると、ブルゴーニュ公自らが日常的に愛用していたと考えられる。

ページ毎の変色の度合いを見ると、著しく汚れている頁と、汚れが目立たない頁が一定の法則性を持って現れていることがわかる。汚れが少ないのは、典礼暦、各祈祷文テクストの 2 頁目以降の（ラテン語）テクストだけを掲載する頁である。反対に汚れが目立つのが、挿絵のあるページとその見開きにあたる頁である。熱烈な芸術庇護者だった善良公にとって、ミュンヘン写本を開いて、中に描かれている挿絵を見ることが重要だったさまが想像される。だが、熱烈な芸術愛好、美的な関心からのみ挿絵を見ていたのだろうか？いくつかの例を取り上げ、仮説を提示してみたい。

Ff. 3v–4、〈キリストの聖顔〉と請願の祈祷 “Salve Sancta facies” の見開きを見ると、f. 4 の祈祷文の書かれた頁の右下が変色していることと、f. 3v の挿絵を含む頁全体が f. 4 と対照的なまで

に濃く変色していることに気づく（図Ⅰ）。巻頭と巻末の羊皮紙の保存条件が悪いことを考慮しても、〈聖顔〉のページ全体の灰色がかった変色とさすったような挿絵のかすれが顕著である。聖顔への祈りを唱えながら、聖顔の画像をただ見るだけではなく、掌で触れて撫でたのではないかと推測できる。

同様に、ff. 21v–22 の見開きを見てみよう。F. 21v は空白で、f. 22 には、悪魔を討伐する大天使ミカエルの雄姿と、それを見上げる祈祷台の前に跪拝する善良公、そして父なる神への祈祷文 “Obsecor te Domine Pater Spiritus …” が書かれている（図Ⅱ）。右下隅は濃く変色し、植物文の絵の具が摩耗している。F. 22v 以降の祈祷文の続きの頁の汚れは比較的大きい。祈祷文の朗誦とともに、図像入り彩飾頭文字 “O” の中の自分の肖像を介した、神へ向けた視覚的なと交流と、挿絵や祈祷文への手での接触による交流とが行われたことが推察される。また、磔刑のキリストの足元に善良公が跪拝する聖母の祈祷文 “Stabat Mater”（ff. 72–73）、ミサの聖体拝領の間に唱える 3 編の祈祷文につけられた 3 点の、ミサに参列する善良公の姿を含む挿絵との各々の見開きの頁でも、ページ下隅の皮脂汚れと彩飾の摩耗が著しい（図Ⅵ）。ここでは、磔刑のキリストや聖体のイメージを祈る者の目に提示するばかりか、祈る者自身の像を含むことで、挿絵を見るという行為の受動性や心理的な距離感を縮め、挿絵が再現する現実を能動的に体験するように促す。善良公の顔貌の皺やたるみの描写は、一方ではポスト・フレマール、ポスト＝ヴァン・エイク時代の緻密なリアリズム肖像画のつつましやかな反映であるが、写実的な描写を通じて善良公の自意識へ作用する、現実世界を反映する鏡のような機能と象徴性を含むものだといえる。ベッドフォード第二世代の画家たちから派生的なミュンヘン写本の第 1、第 2、第 3 の画家が、15 世紀前半までの類型化したお人形のような顔貌の人物像を特徴とするだけに、善良公の顔の写実性は際立って見える。ここにミュンヘン写本に視線を投じながら日常の霊的修養を重ねた善良公の自意識とともに、絵画的なリアリズムと霊性との関連を看取することができるのではないか（Imai, 2020）。

このような視覚と祈祷への意識化は、善良公の姿が描かれていない挿絵でも惹起されたのに相違ない。キリストの受難伝に取材する挿絵と付随する祈祷文では（ff. 78–93）[52]、比較的頁汚れが小さいが、キリストの磔刑の前後や、聖餐に際して唱える俗語・ラテン語の祈祷や、聖母への祈祷と挿絵では、頁の汚れや彩飾の摩耗が比較的大きい。善良公がより好んで唱えた祈祷文なり、祈念のともとしてより頻繁に見た挿絵なりが、十字架上キリスト、聖体、聖母に関わりのあるものであったことが示唆される。善良公があえて加えた後補のテクストを見ると、飾り気ないテクストのみの頁であるにも関わらず、ff. 349v–350 のトマス・アクィナスの請願の頁は全体がくすんで、頁を撫でさすりながら請願の祈りを唱えたことがうかがえる。巻末の ff. 374v–375 以降も、各頁下隅が皮脂焼けし、日常的な祈祷が行われたことを示す。巻頭は、おそらく表紙を上にして平置きをする中世の書籍の配架法が原因となって、長い間に粉塵や外気による傷みを最も大きく被っている部分である。それを考慮してもなお、巻末と同様の頻度で聖人への請願が日々唱えられていたことを、各頁下部の皮脂汚れが示している。

5．写本と読者／使用者の相互関係

『フィリップ善良公のいとも小さき祈祷書』（ミュンヘン写本）は、手にすっぽり収まる大きさで、愛用されていたことが伺える祈祷書写本である。百年戦争時のフランス王、アルマニャック派と和解が成立し、ブルゴーニュ公国内の政治、そして芸術庇護に一層の力が入った 1450 年代初頭に、ミュンヘン写本で工房の若手とでも言えそうな素朴な様式の画家たちが起用された理由など、写本の制作過程において説明しきれない部分が多々残る写本でもある。だが制作年代、使用されていた期間ともに、祖父から受け継いだ『フィリップ豪胆公の大時禱書』に編集を加え、ハーグ写本『フィリップ善良公の時禱書』を制作させた時代にわずかに先行するか、ほぼ同時代である。続いて 1460 年代前半には、シモン・マルミヨンら 3 人の彩飾画家による『フィリップ善良公の祈祷書』（フランス国立図書館、BnF NAF 16428）が制作されたことも想起したい[53]。日常の祈りと信仰の実践と一続きとなった祈祷書写本類の制作について、祈祷文や挿絵の後補、頁に残る手指の痕跡まで考慮に入れることで、写本と使い手との相互作用的なプロセスは、ミュンヘン写本に限定されることではなく、上記の他のパラ典礼写本においても発揮されたはずである。ミュンヘン写本の挿絵は、15 世紀前半のパリの写本彩飾の様式の息吹を残しつつ、フレマールの画家やヤン・ヴァン・エイク等の板絵画家の影響が直截的に反映されていることが二つの点で興味深い。一つは、ブシコー・ベッドフォード様式が、善良公の意図的な選択の結果ではないか、という興味である。板絵ばかりではなく、写本彩飾でも地元ネーデルラント出身の傑出した画家たちをいくらでも取り立てることができたブルゴーニュ公があえて「フランス風」な画家たちを選択したように思われるのである。二つ目は、同時代の視覚性の問題と関わる。1450 年前後の写本彩飾は、様式において板絵画家たちの透徹した細密な写実描写とは異なる、装飾性の高い国際ゴシック様式的な作風を継続していた。このため、ヤンやフレマールの画家の影響は、得てして図像的な源泉、モデル帳の出どころとして言及される嫌いがあったといえる。ミュンヘン写本の素朴な挿絵はそうした傾向を助長しても不思議はない。しかし、善良公がヤンやロヒールの雇用主だったことを想起すれば、図像の型の導入が優れて 15 世紀的な視覚性の核心の枠組みを伴わなかったとは考えにくい。善良公の死後に本格化するゲント＝ブリュージュ派の写本彩飾の緻密な展開を視野に入れるとき、その成立と発展をはぐくんでいたものを先行する 1450 年代の写本群の中に探る必要があると考えている。

ミュンヘン写本については、実地調査を予定しているが、本稿の不備を補うだけではなく、祈るという行為の一連の流れの中で、祈祷者が五感を用いながら、愛用の祈祷書をよすがとして、いかに霊的な世界との交流を行っていたのか、そのことと写本彩飾の様式とデザインはどう関わっていたのか、新しい課題を見定めて研究成果報告書において総括したいと考えている。

（この研究論文は、JSPS 科研費 JP19K00200 の助成を受けたものです。）

注

1） ネーデルラントの彩飾写本、特にパラ典礼写本の使用に関する研究では、Rudy, 2010, 2016, 2017 がある。

2） 黒岩、2020 参照。2016 年までに刊行された 160 件弱の先行研究の一覧は、ハーグ、オランダ国立図書館・メルマンノ＝ウェストレーアヌム図書館所蔵中世彩飾写本データベース・サイトより、『フィリップ善良公の時禱書』写本番号 76 F 2 のページ：［https://manuscripts.kb.nl/search/literature/76+F+2］を参照（2020 年 10 月 30 日閲覧）。

3） ミュンヘン写本は、バイエルン州立図書館デジタルライブラリーで電子ファクシミリ版が公開されている。以下の URL 参照。https://nbn-resolving.org/urn:nbn:de:bvb:12-bsb00095049-6（2020 年 10 月 16 日閲覧）

4） 善良公が描かれているのは、f. 22 の図像入り彩飾頭文字、ff. 72v, 133v, 141, 144 の挿絵内である。【附録 1】参照。ヴァン＝ビューレンは、f. 144 を除き善良公の肖像は、1450 年代前半に善良公の侍従職にあった彩飾画家ドリュー・ジャンによって描き直されたものだと述べている。Van Buren, 2000, p. 71, n. 18 および 2002, p. 1396, n. 61 参照。ブースマンは、ドリュー・ジャンが加筆したことを前提として、ミュンヘン写本がベルギー王立図書館蔵『フィリップ豪胆公の祈祷書』（KBR 11035-37）から分冊されたと述べている（Bousmanne, 2000, p. 81,n. 36）。しかし、写本の大きさの著しい差異を考慮すると単純に分冊されたとは考えにくい。これらの点は、ミュンヘン写本の実地調査の際に再検討し、今後刊行予定の報告書に反映したい。

5） 一般的な記述のため、確実に同定することはできないが、Barrois, 1830, no. 2044 は、ミュンヘン写本を指示する可能性を持っている。Doutrepont, 1906 からは、該当する項目を確認できなかった。

6） Van Buren, 2002, p. 1396 参照。ミュンヘン写本の「いとも小さき」という形容辞は、原文の “Tiny Prayerbook” を直訳した。参考までに、「極小」に類する作例として知られているものに、15 世紀末の作例ながらフランス国立図書館蔵『アンヌ・ド・ブルターニュのいとも小さき時禱書』（NAL 3120）があり、寸法は約 65 × 40 ミリである。例えば、ニューヨーク、クロイスターズ・コレクション蔵『ジャンヌ・デヴルーの時禱書』が「極小」とは呼ばれないように、高さ 100 ミリ弱の名刺大の時禱書は、小型ではあれ標準的なサイズである。ミュンヘン写本の呼称は、実地調査の結果により確定するつもりである。

7）こうした折丁末の空白頁と後補テクストについては、以下、第 4 節で詳述する。

8）［https://app.digitale-sammlungen.de/bookshelf/bsb00095049］（2020 年 10 月 30 日閲覧）

9）【附録 1】折丁構成で示したように折丁番号のない見返しと遊び紙には便宜上小文字のローマ数字でフォリオ番号を付した。

10）書体の定義は Derolez, 2003, p. 124 に準拠した。

11）パリを中心としたバタルド書体への転換は、Avril & Reynaud, 1993 が参考となる。同時代のネーデルラントの写本の書体については、Van Buren, 1996 および以下、註 12 参照。

12）実例は、以下のカタログを参照。Randall, 1993; Kren & McKendrick, 2003; Nigel & Panayotova, 2009; Bousmanne & Delcourt, 2011.

13）以下、p. 13。また、ヤン・ヴァン・エイク作《キリストの聖顔》ならびに模作については、Sugiyama, 2017 参照。

14）棒状装飾に近似する植物モティーフが埋め込まれた U 字型の帯状の装飾がテクスト欄と頁余白の境界に配置される例が、ff. 42、49v、72v、100v、に認められる。

15）金の細線が上記註 12 で列挙したページと同様の U 字型に描かれている例が 173v、240、271、315v にあるが、14 世紀から 15 世紀前半のパリ彩飾写本で多用された大型彩飾頭文字から延長される棒状装飾が、頭文字からも分離して借用されたように見える。

16）以上の欄外余白の美術史的な位置づけについては、以下、第 3 節参照。

17）同様のぼかした金彩による植物文は、以下、第 3 節で詳述する、デュノワの画家に特徴的なモティーフである。

18）最近の研究は、F. アヴリル、2002、Bartz, 1999 および 2006、Châtelet, 2000、Andrews, 2002 等参照。

19）ブシコーおよびベッドフォード様式の 1410 年代から 1440 年代のパリにおけるネーデルラント絵画の受容を含む展開については、Clark, 2016, pp. 2–54 も参照。

20）ベッドフォードの画家が 1435 年頃に死去したと推定されている。

21）BL Add.MS 18850 のカタログ、参考文献一覧、電子ファクシミリ版は、大英図書館の以下のサイト参照。［ http://www.bl.uk/manuscripts/FullDisplay.aspx?index=0&ref=Add_MS_18850 ］（2020/11/4 アクセス）

22）通称の由来は『デュノワ時禱書』（BL Yates Thompson　MS 3）。以下、註 23 参照。また、デュノワの画家については、F. アヴリルによって 1444 年から 49 年にかけて活動記録が残るジャン・アンスラン Jean Haincelin と同定する説が提起されている。ここでは、レイノー説に立ってデュノワの画家という通称で統一することにしたい。Avril & Reynaud, 1993, pp. 36–38, Rouse & Rouse, 2000, II, pp. 73–74 および Reynaud, 1999 参照。

23）同写本については、Châtelet, 2008 および大英図書館の詳細なカタログ、参考文献一覧、電子ファクシミリを掲載する以下のサイトを参照。（2020/11/4 アクセス）
［http://www.bl.uk/manuscripts/FullDisplay.aspx?index=3&ref=Yates_Thompson_MS_3］

24）ネーデルラントの写本彩飾にみる服飾モードに関しての総合的な論考として、Van Buren & Wieck, 2011 がある。

25）『デュノワ時禱書』f. 252v。ここでは、欄外余白左下の聖グレゴリウスのミサと悲しみの人と恩寵の座が組み合わされた複合的な主題として描かれている。フレマールの画家に帰属される《恩寵の座》は、ウィーン美術史美術館所蔵の黄金羊毛騎士団礼拝堂の祭壇飾り刺繍布（下図の制作年代 1432–33 年頃）がある。近年は工房作と見なされているサンクトペテルブルク、エルミタージュ美術館所蔵の板絵（収蔵番号 442）は、1440 年代の同主題の広範な普及を証拠立てるものである。Lichtenberg, 1932, Thürlemann, 2002, pp. 320–323, 鈴木、2011 参照。

26）下で述べる通り、デュノワの画家も参画したパリ使用式の時禱書（BL Egerton, 2019）では、ベッドフォード工房のミュンヘン黄金伝説の画家によるフレマール式恩寵の座図像が描かれている。

27）Reynaud, 1999 参照。同時禱書の電子ファクシミリ版および詳細なカタログ情報は、フランス国立図書館の以下のウェブ・ページを参照。［https://archivesetmanuscrits.bnf.fr/ark:/12148/cc20894j］（2020/11/1 アクセス）

28）ダブリン、チェスター・ビーティ図書館、MS W 082。同写本について、Bryne, 1974 参照。

29）チェスター・ビーティ図書館蔵の 1408 年の年記がある『チェスター・ビーティ時禱書』（W. 130, f. 160）の、ブシコーの画家にきわめて近い協力者マザリーヌの画家による同主題までさかのぼることが可能だと思われる。

30）ミュンヘン黄金伝説の画家については、Ungehauer, 2017 参照。

31）BL Egerton, 2019 については、大英図書館ウェブサイトの詳細なカタログ、参考文献一覧、電

子ファクシミリ版を参照。（2020 年 11 月 5 日アクセス）［http://www.bl.uk/manuscripts/FullDisplay.aspx?index=37&ref=Egerton_MS_2019］

32）ジャン・ロラン 2 世の画家については、Avril & Reynaud, 2003, pp. 38–45 参照。

33）この時禱書の電子ファクシミリ版とカタログは、フランス国立図書館の以下のウェブサイトを参照：［https://archivesetmanuscrits.bnf.fr/ark:/12148/cc79778p］（2020/11/11 日アクセス）

34）『スランガトゥク時禱書』の複数の彩飾画家、簡潔なカタログ、電子ファクシミリ版は、ゲッティ美術館の以下のサイトを参照。［https://www.getty.edu/art/collection/objects/1391/willem–vrelant–master–of–the–llangattock–hours–master–of–the–llangattock–epiphany–et–al–llangattock–hours–flemish–1450s/］（2020/11/01 アクセス）

35）『アレンベルク時禱書』の彩飾を施した頁のみ、ゲッティ美術館のウェブサイトで公開されている。以下を参照。［https://www.getty.edu/art/collection/objects/1392/willem–vrelant–and–workshop–arenberg–hours–flemish–early–1460s/］

36）『レオノール・デ＝ラ＝ベガ時禱書』の電子とカタログは、スペイン国立図書館の次のウェブサイトを参照。［http://bdh.bne.es/bnesearch/detalle/bdh0000048889］

37）ウィレム・ヴレラントに関する研究は、Bousmanne, 1997 以降、Kren & McKendrick, 2003, Bousmanne & Delcourt, 2011 参照。

38）【附録 2】、ff. 1 から 3 の祈祷文の翻刻と解説を参照。

39）【附録 2】、ff. 375 から 379v の項目参照。

40）【附録 2】、ff. 6v–7v および f. 20v、ff. 349v–350 の項目参照。

41）【附録 2】、f. 143v および f. 343v 項目参照。

42）後補を詳細に扱う【附録 2】とは別に、【附録 1】ではミュンヘン写本の総合的なカタログをまとめた。同附録は、昨年作成したカタログに加筆をした、ミュンヘン写本の実地調査までの暫定版である。

43）書体名については、Derolez, 2003、pp. 130–132, 163–166 を参照した。

44）最近ネーデルラント彩飾祈祷書研究で、祈祷行為と写本を関連付けるルディの一連の考察のうち、接吻痕、手指の接触の痕跡に注目する Rudy, 2010 も参照。

45）【附録 2】では、彩飾頭文字が書かれずに空白のままになっている箇所については、括弧［ ］で示した。

46）ダヴィッド・オベールの書体は、以下の写本を参照。直筆と断りのない場合は工房作。アルスナル図書館、Arsenal ms. 6328（直筆・1459 年）、電子ファクシミリ版（以下同）［https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b55005886f］；ベルギー王立図書館、KBR ms.IV 106（1461 年）、［https://uurl.kbr.be/1738446］；スペイン国立図書館、ms.Vitr. 25. 2（直筆・1462）, ［bdh0000010641］；KBR ms. 6（1463 年）、［https://uurl.kbr.be/1747750］；KBR ms. 9106（直筆・1475 年）、［https://uurl.kbr.be/1780283］；ゲッティ美術館、Getty ms. 30（1475 年）、［https://www.getty.edu/art/collection/objects/1502/simon–marmion–and–david–aubert–les–visions–du–chevalier–tondal–franco–flemish–1475/］（以上、2020 年 10 月 30 日アクセス）なお、ブルゴーニュ公国を中心とするネーデルラントの書籍への写字に使用される正書体としてのクルシヴァ書体の草書体からの独立に関する分析である Derolez, 2003, 130–132 および 163–166 は、ミュンヘン写本を含むｂやｄなどのアセンダーの特徴と合致する。ダヴィッド・オベールの書体については、Derolez, Pl. 139 参照。

47）ベルギー王立図書館、ms. 2355。1450 年から 60 年頃、フランス東北部またはネーデルラント

で制作。

48）『フィリップ豪胆公の大時禱書』の概要と f. 249v の電子画像は、フィッツウィリアム美術館の以下のウェブサイト参照。［ https://www.fitzmuseum.cam.ac.uk/illuminated/manuscript/discover/the-hours-of-philip-the-bold］（2020 年 11 月 10 日アクセス）

49）Ff. 319–343。具体的な聖人については、【附録 1】参照。

50）ルーヴァンのベギン会付属聖堂身廊北壁に、バルバラ伝の壁画（14 世紀）が現存する。Frykund, 2011, pp. 144–153 参照。

51）フィリップ善良公は、聖バルバラ同信会を後援したことが知られている。Schnerb, 2005 参照。ブリュッセルのサント・ギュデュル聖堂には、15 世紀作成の聖バルバラ同信会の帳簿が現存する。De Raadt, 1893 参照。また、フィレンツェで活動したネーデルラント出身者の機織り職人が加入した同信会が、14 世紀からバルバラに奉献されている。Battistini, 1931 参照。

52）しかし、ff. 78–93 のキリスト受難の挿絵群が、技量が稚拙な第 2 の画家によって描かれたことが、手指の皮脂汚れが少ないことと関係している可能性もある。

53）同写本については、Avril & Reynaud, 1993, p. 88, no. 39 およびフランス国立図書館のオンライン写本カタログ参照：http://archivesetmanuscrits.bnf.fr/ark:/12148/cc5978r　また、電子ファクシミリ版は以下を参照：https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b10549442f　（2020 年 12 月 16 日アクセス）

参考文献

Alexander, Jonathan J.G., Marrow, James H. & Sandler, Lucy Freeman（eds.）（2005）. *The Splendor of the Word: Medieval and Renaissance Illuminated Manuscripts at the New York Public Library.* London/ Turnhout: Harvey Miller.

Analecta hymnica（1898）. Vol.XXVIII. Dreves, G.M., Blume, C., & Bannister, H.M.（eds.）. Leipzig.

Andrews, C.（2002）. The Boucicaut Masters. Gesta, 41（1）, 29–38.［doi:10. 2307/767203］

As–Vijvers, A.M.W. & Korteweg, A.S.（eds.）（2018）. *Splendour of the Burgundian Netherlands: Southern Netherlandish illuminated manuscripts in Dutch collections.* Utrecht: Museum Catharijneconvent.

Avril, François & Reynaud, Nicole（2003）. *Les manuscrits à peintures en France, 1440–1520 Paris : Bibliothèque nationale de France/ Flammarion.*

Barrois, J.（1830）. *Bibliothèque protypographique, ou librairies des fils du roi Jean, Charles V, Jean de Berri, Philippe de Bourgogne et les siens.* Paris.

Bartz, Gabriele （1999）. *Der Boucicaut–Meister. Ein unbekanntes Stundenbuch*. Rotthalmünster: Heribert Tenschert Antiquariat.

Battistini, Mario (1931). *La confrerie de Sainte-Barbe des Flamands à Florence: Documents relatifs aux tisserands et aux tapissiers*. Bruxelles: Maurice Lamertin, libreur-éditeur.

Bousmanne , Bernard （1997）. *Item à Guillaume Wyelant aussi enlumineur : Willem Vrelant : un aspect de l’ enluminure dans les Pays–Bas méridionaux sous le mécénat des ducs de Bourgogne, Philippe le Bon et Charles le Téméraire.* Bruxelles :Bibliothèque royale de Belgique/ Turnhout : Brepols.

Bousmanne, B.（2000）. Le deuxième volume des *Chroniques de Hainaut*（Bruxelles, KBR,

ms. 9243）: manuscrit « non parfait » ou commande de prestige ? In : Van den Bergen–Patens, C.（ed.）, pp. 75–82.

Bousmanne, B. & Delcourt, Thierry （2011）. *Miniatures flamandes, 1404–1482.* Bruxelles : Bibliothèque royale de Belgique/ Paris : Bibliothèque nationale de France.

Bousmanne, B. & Van Hoorebeek, C.（eds.）（2000）. *La Librairie des ducs de Bourgogne. Manuscrits conservés à la Bibliothèque royale de Belgique*, t.I, *Textes liturgiques, ascétiques, théologiques, philosophiques et moraux.* Turnhout : Brepols.

Bryne, Donal （1974）. The Hours of the admiral Prigent de Coëtivy. In: *Scriptorium* 28, pp. 248–261.［DOI : https://doi.org/10. 3406/scrip. 1974. 1060］

Châtelet, Albert （2008）. Les Heures de Dunois. In : *Art de l'enluminure*, 25, juin–juillet–août, 12–27.

Clark, Gregory T. （2011）. Le Maître du Girart de Roussillon. In : Bousmanne & Delcourt, pp. 188–190.

Clark, G.T.（2016）. *Art in a time of war: The manuscript of Morgan 453 and manuscript illumination in Paris during the English occupation （1419–1435）*. Toronto: Pontifical Institute of Mediaeval Studies.

Corpus orationum. Moeller, Edmond–Eugène, Clément, Jean–Marie & Wallant, Bertrandus Coppieters 't（eds.）. 14 Vols. Turnhout : Brepols, 1992–2004.

Delaissé, L.M.J.（1955）. Les Chroniques de Hainaut et l' atelier de Jean Wauquelin à Mons, dans l' Histoire de la Miniature Flamande." in: *Miscellanea Erwin Panofsky, Bulletin des Musées royaux des beaux–arts/ Koninklijke Musea voor Schone Kunsten*, vol. 1–3 , pp. 21–56.

De Raadt, J.–Th.（1893）. *Le registre de la Confrérie de Sainte–Barbe en l'église Sainte–Gudule à Bruxelles（une pièce de vers flamande du XVe siècle）*. Gand : Imprimerie Eug. Vanderhaegen.

Derolez, Albert （2003）. *The palaeography of Gothic manuscript books from the twelfth to the early sixteenth century.* Cambridge: Cambridge University Press.

Deshusses, Jean（1988）. *Le sacramentaire grégorien［Texte imprimé］: ses principales formes d'après les plus anciens manuscrits : édition comparative.* 2e édition revue et corrigée. Fribourg : Editions universitaires.

De Winter, Patrick M. & Cockshaw, Pierre（1982）. The illustrations of the *Chroniques de Hainaut* in the fifteenth–century. In: *Scriptorium* 36–1, pp. 139–141.
［DOI : https://doi.org/10. 3406/scrip. 1982. 1260］

Dogaer, Georges（1987）. *Flemish miniature painting in the 15th and 16th centuries.* Amsterdam: B.M. Israël.

Doutrepont, Georges（1906）. *Inventaire de la « librairie » de Philippe le Bon.* Bruxelles.

Fryklund, Carina（2011）. *Late gothic wall painting in the Southern Netherlands.* Turnhout: Brepols.

Gambier–Parry, R.T. （1912–1913）. *The Colbertine Breviary.* 2 Vols., London: Henry Bradshaw Society.

Gaude–Ferragu, Murielle（2004）. Les dévotions princières à la fin du moyen âge : Les testaments des ducs de Bourgogne et de leur famille（1386–1477）. In : *Revue du Nord,* 354, pp. 7–23.

Harbison, Craig （1985）. Visions and meditations in early Flemish painting. In: *Simiolus* 15, pp. 87–118.

Hofmann, Mara （2007）. Haincelin de Haguenau et l'acanthe à Paris. In : Hoffmann, M. & Zöhl, C. （eds.）, *Quand la peinture était dans les livres. Mélanges en l'honneur de François Avril.* Turnhout : Brepols, pp. 98–109.

Imai, Sumiko （2020）. The portrait of Philip the Good, Duke of Burgundy at Prayer : Crossing of sacred and profane, or public and private in early Netherlandish painting. In: *Bulletin of Osaka Ohtani University* 54, pp. 143–171.

König, Eberhard（2007）. *The Bedford Hours: The making of a medieval masterpiece*. London: British Library.

Kren, Thomas & McKendrick, Scott （2003）. *Illuminating the Renaissance : the triumph of Flemish manuscript painting in Europe. Exhibition catalogue.* Los Angeles : The J. Paul Getty Museum ; London : Royal Academy of Arts.

Leroquais, Victor （1929）. *Le Bréviaire de Philippe le Bon. Bréviaire parisien du XVe siècle.* Œuvre national de la reproduction de manuscrits à miniatures de Belgique.（Société des Bibliophiles et Iconophiles de Belgique）. Paris/ Bruxelles/ New York.

Leroquais, V. （1932–1934）. *Les bréviaires manuscrits des bibliothèques publiques de France.* 6 Vols. Paris.

Lichtenberg, R. （1932）. Over den oorsprong en de eerste beteeknis van den genadestoel, *Collectanea Franciscana Neerlandica* III. 1. 's–Hertogenbosch, pp. 26–35.

Marrow, James H. （2006）. Chapter 13. Scholarship on Flemish manuscript illumination of the Renaissance: Remarks on past, present, and future. In: Morrison, E. & Kren, T.（eds.）, pp. 163–176.

Marrow, J. H. （2007[1]）. Illusionism and paradox in the art of Jan van Eyck and Roger van der Weyden: Case studies in the shape of meaning. In: Zöhl & Hofmann, pp. 156–175.

Marrow, J.H.（2007[2]）. Notes on the liturgical 'use' of the Hours of the virgin in the Low Countries. In: Biemans, J., van der Hoek, K., Rudy, K.M. & van der Vlist, E.（eds.）. *Manuscripten en miniatures: Studies aangeboden aan Anne S. Korteweg bij haar afcheid van de Koninklijke Bibliothek.* Zutphen: Walburg Pers, pp. 279–294.

Martens, M., Borschaert, T.–H., Dumolyn, J., De Smet, J. & Van Dam, F.（dirs.）（2020）. *Van Eyck : Une révolution optique.* Gand : Hannibal– MSK.

Meiss, Millard （1967）. *French painting in the time of Jean de Berry : the late fourteenth century and the patronage of the Duke.* London/ New York: Phaidon.

Meiss, M. （1968）. *French painting in the time of Jean de Berry: The Boucicaut Master.* New York: Phaidon.

Meiss, M. （1974）. *French Painting in the time of Jean de Berry: The Limbourgs and their contemporaries*. 2 Vols., New York: Thames and Hudson.

Morgan, Nigel & Panayotova, Stella（eds.）（2009）. *A catalogue of western book illumination in the Fitzwilliam museum and the Cambridge colleges.* Vol. 2: *The Meuse region, Southern Netherlands.* London/ Turnhout: Brepols.

Morrison, Elizabeth & Kren, Thomas （2006）. *Flemish manuscript painting in context: Recent research.* Los Angeles: Getty Publications.

Paxton, Frederick S.（2013）. *The death ritual at Cluny in the central Middle Ages:*

Poirters, Ad （2016）. *Preserving ths spirit of Windesheim: An archaeological interpretation of the traces of Rector Arnoldus Beckers （1772–1810）in books from the Convent of Soeterbeeck.* Nijmegen: Radboud University Nijmegen.

Randall, Lilian M.C.（ed.）（1997）. *Belgium, 1250–1530*（Medieval and Renaissance manuscripts in the Walters Art Gallery, 3）. Baltimore: Johns Hopkins University.

Reynaud, Nicole （1999）. Les Heures du chancelier Guillaume Jouvenel des Ursins et la peinture parisienne autour de 1440. In : *Revue de l'art* 126, pp. 23–25.

Reynolds, Catherine（2006）. The workshop of the Master of the Duke of Bedford: Definitions and identities. In: Croenen, Godfried & Ainsworth, Peter（eds.）. *Patrons, authors and workshops: Books and book production in Paris around 1400.* Leuven : Peeters, pp. 437–372.

Reynolds, C.（2007）. Netherlandish patterns in fifteenth–century Paris: Campin, van der Weyden and the Bedford workshop. In: Zöhl, Caroline & Hofmann, Mara（eds.）. *Von Kunst und Temperament. Festschrift für Eberhard Köning.* Turnhout : Brepols, pp. 216–225.

Rouse, Richard H. & Rouse, Mary A. （2000）. *Manuscripts and their makers: Commercial book producers in medieval Paris 1200–1500.* 2 Vols. Turnhout: Brepols.

Rudy, Kathryn M.（2010）. Dirty books: Quantifying patterns of use in medieval manuscripts using a densitometer. In: *Journal of Historians in Medieval Art*, Vol. 2. 1–2. ［DOI: 10. 5092/jhna. 2010. 2. 1. 1］

Rudy, K.M. （2011）. Kissing images, unfurling rolls, measuring wounds, sewing badges and carrying talismans: Considering some Harley manuscripts through the physical rituals they reveal. In: *Electronic British Library Journal*, article 5.
［https://www.bl.uk/eblj/2011articles/pdf/ebljarticle52011.pdf］

Rudy, K.M. （2016）. *Piety in pieces: How medieval readers customized their manuscripts.* Open Book Publishers.

Rudy, K.M. （2017）. *Rubrics, images and indulgences in late medieval Netherlandish manuscripts.* Leiden: Brill.

Schnerb, Bertrand（2005）. La piété et les dévotions de Philippe le Bon, duc de Bourgogne（1419–1467）. In: *Comptes rendus des séances de l'Académie des Inscriptions et Belles–Lettres*, 149e année, N. 4, 1319–1344.［DOI : https://doi.org/10. 3406/crai. 2005. 22948］

Spencer, Eleanor P. （1963）. L'Horloge de Sapience （ Bruxelles, Bibliothèque Royale , ms. IV 111）. In: *Scriptorium*, 17–2, 277–299.［DOI : https://doi.org/10. 3406/scrip. 1963. 3181］

Spencer, E.P.（1965）. Ciboule and the Bedford Master' s shop . In: *Scriptorium*, 19–1, 104–108. DOI : https://doi.org/10. 3406/scrip. 1965. 3234

Sugiyama, M. （2017）. Replicating the sanctity of the Holy Face: Jan van Eyck's "Head of Christ". In: *Simiolus: Netherlands Quarterly for the History of Art* 39 （1/2）, 5–14.［Stable URL: https://www.jstor.org/stable/26382794］

Thomas, Marcel（1976）. Le livre de prières de Philippe le Bon : premier bilan d' une découverte. In : *Les Dossiers de l'archéologie* , vol. 16, mai–juin, pp. 84–95, ill.

Thürlemann, Felix （2002）. *Robert Campin : A monographic study with critical catalogue.* Munich: Prestel.

Ungeheuer, Laurent （2017）. Le Maître de la Légende dorée de Munich, un émule du Maître de

Bedford: Collaborations et indépendance d'un enlumineur parisien entre 1420 et 1450. In : *Revue de L'Art*, 195, 23–32.

Van Buren, Anne Hagiopian（1996）. Philip the Good's manuscripts as documents of his relations with the Empire", in: Rencontres de Nimegue（21 au 24 septembre 1995）: "Payes bourguignons et terres d' Empire（XVe–XVIe s.）: rapports politiques et institutionels". Actes publies sous la direction de Jean–Marie Cauchies, Secretaire general du Centre,（Publication du Centre europeen d' etudes bourguignonnes（XIVe– XVIe s.）No. 36）, Neuchatel, pp. 48–69.

Van Buren, A.H.（2000）. The artists of volume I. In: Van den Bergen–Patens, C.（ed.）, pp. 65–74.

Van Buren, A.H. （2002）. Dreux Jehan and the *Grandes Heures* of Philip the Bold. In: Cardon, B., Van der Stock, J. & Vanwijnsberghe, D. （eds.）, *«Als Ich Can»: Liber amicorum in memory of Professor Dr. Maurits Smeyers.* Leuven: Peeters, pp. 1377–1414.

Van Buren, A.H. & Wieck, Roger S.（2011）. *Illuminating fashion : dress in the art of Medieval France and the Netherlands, 1325–1515*. New York: The Morgan Library & Museum.

Van den Bergen–Patens, C. （ed.）（2000）, Les Chroniques de Hainaut ou les ambitions d'un prince bourguignon. Bruxelles : KBR / Turnhout : Brepols.

Villela–Petit, Inès（2003）. *Le bréviaire de Châteauroux.* Paris : Somogy.

今井澄子（2015）『聖母子への祈り : 初期フランドル絵画の祈祷者像』国書刊行会。

今井澄子（2019）「フィリップ善良公の祈禱者像 ── 初期ネーデルラント美術における聖俗・公私の交錯 ──」『移ろう形象と越境する芸術 ── 小林頼子先生退職記念論文集』八坂書房。

黒岩三恵（2020）「フィリップ善良公の私的信仰 : ハーグ、ミュンヘン、パリの 3 写本にみるトマス・アクィナス祈祷文とイメージの関わり」『ことば・文化・コミュニケーション：異文化コミュニケーション学部紀要』12, 1–26。

鈴木伸子（2010）「ロベール・カンパンの後期作品 --《ヴェルル祭壇画》を中心に」日仏美術学会会報 (30), 3–20。

【附録 1】『フィリップ善良公のいとも小さき祈祷文集』の構成 [A)]

装幀：濃褐色紙？製の表紙、表紙の四隅に金属の補強版、表紙に表裏各々 5 個の半球形の金属製装飾、2 丁の金属製留め金。金属部分には七宝製植物文。いずれも近代以降の様式。天地・小口に金箔。

料紙：獣皮紙、379 葉。

寸法・罫線レイアウト：約 10 × 7cm・テクスト・コラム 1 列、12 行。罫線、赤色インク。

折丁構成：（ff.i–iiv フォリオ番号表記なし：見返し・遊び紙）^{2}、（ff.iii–7v）^{8},（ff. 8–15v）^{8},（ff. 16–21）^{6},（ff. 22–29v）^{8},（ff. 30–37v）^{8},（ff. 38–45v）^{8},（ff. 46–53v）^{8},（ff. 54–61v）^{8},（ff. 62–69v）^{8},（ff. 70–77v）^{8},（ff. 78–85v）^{8},（ff. 86–93v）^{8},（ff. 94–101v）^{8},（ff. 102–109v）^{8},（ff. 110–117v）^{8},（ff. 118–125v）^{8},（ff. 126–133v）^{8},（ff. 134–141v）^{8},（ff. 142a–148v）^{8},（ff. 149–157v）^{9},（ff. 158–167v）^{10},（ff. 168–175v）^{8},（ff. 176–183v）^{8},（ff. 184–191v）^{8},（ff. 192–197v）^{6}, ff. 198–270v 折丁構成不明,（ff. 271–278v）^{8}, ff. 279–302v 折丁構成不明,（ff. 303–310v）^{8},（ff. 311–318v）^{8},（ff. 319–326v）^{8},（ff. 327–334v）^{8},（ff. 335–342v）^{8},（ff. 343–350v）^{8},（ff. 351–358v）^{8},（ff. 359–366v）^{8},（ff. 367–374v）^{8},（ff. 374–379 ＋遊び紙）^{6},（ff.i–iiv フォリオ番号無標記：遊び・見返し）.

全折丁でレクラムは後年の再装丁の際に切除されているが、若干の折丁最終頁右下角でレクラムの文字の上端が辛うじて確認できる。また、フォリオ番号 142 が重複表記されている（f. 142a，f. 1142b）。

［上記の折丁構成は、バイエルン州立図書館デジタルライブラリー、電子ファクシミリ版の閲覧により、製本の綴じ糸、レクラムの痕跡、祈祷文テクストの区切り等から推測した、暫定的な知見である。］

［以下、クオーテーション・マーク “ ” は祈祷文本文抜粋、二重ギユメ « » は赤色標題見出し抜粋を示す。挿絵は、「いとも小さき祈祷書の第 1 の画家」を①、同写本「第 2 の画家」を②、「第 3 の画家」を③と表記した。また、アスタリスク * が付されているものがウィレム・ヴレラント（工房）筆のものである。］

i：きき紙（獣皮紙）鉛筆による書き込み «（Cimol B. 6）/ Cod. gall. 40 / numi. Cim. 158 / ✓ »

ii：遊び紙（獣皮紙）

iii : 包装等による紙焼けあと、f.iiiv に、f. 1 と同じ赤色罫線（空白）

Ff. 1–2：（後補 [B)]）聖バルバラの請願（図 1）

Ff. 2–3：（後補）聖ブラジウスの請願

F. 3v：（挿絵）〈キリストの聖顔〉（図 I ）

Ff. 4–6：**“Salve sancta facies nostri redemptoris”**

Ff. 6v–7v：（後補）聖クィンティヌスの請願

Ff. 8–19v：典礼暦

Ff. 20：罫線なし空白

F. 20v：（後補）**“Benedictus Dominus Deus meus, qui docet manus meas”**

F. 21r–v：罫線なし空白

F. 22：父なる神への祈祷文（挿絵）①〈ドラゴンを退治する大天使ミカエル〉（図像入り彩飾頭文字O）〈大天使を見上げ祈るフィリップ善良公〉**“Obsecro te Domine Pater Spiritus angelice”**（バ・ド・パージュ）ブルゴーニュ公の大紋章（図Ⅱ）

F. 37v：聖母への祈祷文 *« Cy doibvt on dire .xv. foys Ave Maria. Devote oroison Nostre Dame. »*

F. 38：（挿絵）①〈受胎告知〉**“O excellentissima et gloriosissima atque sanctissima Virgo”**（図Ⅲ）

F. 42：（挿絵）①〈聖母のエリザベツ訪問〉**“O gloriosa Domina que filium Dei”**（図 2）

F. 43v ：（ 挿 絵 ） ①〈 降 誕 〉**“Sancta Maria mater Domini nostri Jhesu Crishi dulcesissima in manus”**

F. 45v：*« Aultre que oroison de Nostre Dame contre les tempations de la char. »*

F. 46：（挿絵）①〈授乳する聖母〉**“Fluat stilla de mamilla gloriose semper Marie virginis”**

F. 47v：*« Aultre oroison de Nostre Dame contre les temptacions de ce monde. »*

F. 48：（挿絵）①〈庭園の謙譲の聖母子〉**“De precor te, Domina Sanctissima par illam lecitiam”**

F. 49v：聖霊への奉献ミサ（挿絵）①〈聖霊降臨〉**“Veni, Creator spiritus mentes tuorum” 聖霊降臨祭　賛歌・f. 51 受難の時祷、三時課第 8 式文、奉献文 Emitte spiritum tuum、答唱 Et renovabis faciem terre**

F. 54：詩篇 51（挿絵）①〈神に懇願するダヴィデ王〉**“Misere mei Deus secundum misericordiam tuam”**

F. 57v：*« S’ensuit la psaulme que fist saint Anastaise. »*

F. 58：アタナシウス信条（挿絵）①〈恩寵の座〉**“Quicumque vult salvus esse ante omnia opus est ut tenat catholicam fidem”**（図 3）

F. 65：*« Cy commence l’ oroison saint Thomas d’Aquin. »*

F. 65v：聖トマス・アクィナスの祈祷文「慈悲深き神よ汝に喜ばしきことを我に授け給え」（挿絵）①〈キリストの洗礼〉**“Concede michi Miserocors Deus que tibi placeta sunt”**

F. 70v：聖バルバラの請願[C]（挿絵）①〈緑地に坐す聖バルバラ〉**” O prudens et vigilans virgo qualis es cum sponso illo”**（図 4）

F. 72：*« Devote oroison a dire devant Nostre Dame et touchant la passion de son cuer quant elle veist Nostre Seigneur pendu en l’arbre de la croix. »*

F. 72v：続唱「悲しみの聖母は立てり」[D]（挿絵）①〈十字架上のキリストを見上げ嘆く聖母とヨハネ、跪拝し祈るフィリップ善良公〉**“Stabat Mater dolorosa juxta crucem lacrimosa”**（図 4）

F. 75v：*« S’ensuit devote oroison a Nostre Seigneur Jhesu Crist que feist St. Anselme. »*

F. 76：伝アンセルムの俗語祈祷文（挿絵）②〈キリストの変容〉**“Tres puissant, tres debonnaire, tres cher, tres doulz, tres ame, tres bel”**

F. 78：俗語による主への祈祷文（挿絵）②〈エルサレム入城〉**“Sire Dieu je te amme mais petit**

et tiedement . Donne moy le don de toy”

F. 81：俗語によるイエス・キリストへの祈祷文（挿絵）②〈最後の晩餐〉**“Sauvez de noz ames doulz Jhesu et soigneur phisicien qui si angoisseusement su az por nous garir. ”**（図Ⅳ）

F. 83v：俗語による主への祈祷文（挿絵）②〈聖体が載ったカリスを前にオリーブ山で祈るキリスト〉**“Bon sire a ta pitie je rens grace, car tu ne m’as pas laissie morir en pechie”**

F. 86：俗語によるキリストへの祈祷文（挿絵）②〈キリストの逮捕〉**“O Pasteur tres piteux, ou quel est le tres for de sapience qui pour tes foles brebis te donnas a mort”**

F. 87v：俗語による主への祈祷文（挿絵）②〈ピラトの前のキリスト〉**“O fontaine de vie et de toute doulceur en laquelle prennent tous les esperits celestes habondamment et souverainnement”**

F. 89v：俗語による神への祈祷文（挿絵）②〈キリストの鞭打ち〉**“Haa, mon sire tres desirable mon Dieu, ma vertu, mon firmament, mon refuge, mon delivreur, mon aideur, mon defendeur”**

F. 91v：俗語によるイエス・キリストへの祈祷（挿絵）②〈十字架の道行き〉**“Tres doulz Jhesu et tres bel duquel veoir la tres glorieuse face est accomplissement de tous desires”**

F. 93v：*« quiconques dira ceste oroison a genoux flexes le pape Gregoire luy donne .ij. mil ans de vray pardon et la Vierge Marie denoncera sa mort par .xl. jors devant. Et est l’orison de Bede prestre et sont les paroles .vij. que Nostre Sauveur dist en l’abre de la croix. »*

F. 94：贖宥が得られるベーダ作祈祷文の俗語訳（挿絵）②〈磔刑〉（図像入り彩飾頭文字 D）②〈骰子でキリストの衣服を賭ける兵士〉**“Domine Jhesu Criste qui septem verba die ultimo vite tue in cruce pendens dixiti”**（図 5）

F. 98v：*« Et est moult porfitable a dire en quaresme pour la souvenance de la passion de Nostre Seigneur Jhesu Crist. Oroison. »* キリストの受難を記念する四旬節の祈祷 **“Precor te piissime Domine Jesu Criste propter illam caritatem”**

F. 100v：（挿絵）②〈十字架降下〉**“Domine Deus omnipotens Pater et Filius et Sanctus Spiritus da michi famulo tuo. ”**

F. 108v：（挿絵）②〈キリストの埋葬〉**“Mon Seigneur et mon Dieu se j’ay fait pechie et suy vers toy coulpable, je ne peuz touteffoys oncques tant faire. ”**

F. 110v：*« Briefve meditation de la passion Nostre Seigneur. Oratio affectuosa Cristi passonem meditantis. »*

F. 111：（挿絵）①〈聖墳墓の 3 人のマリア、復活したキリスト〉**“Imperator celestium infernorum terrestrium Deus et homo paritus”**

F. 116v：（挿絵）②〈キリスト昇天〉**“Domine Deus omnipotens pie clemens paciens imtis ac multum misericors respice”**

F. 121v：（挿絵）①〈キリスト再降臨・死者の復活〉**“Juste et vray juge Jhesu Criste roy des roys**

et seigneur des seigneurs qui tous jours regnes avecques le père et le saint esperit"

F. 126r–v：*« S'ensuivent devotes oroisons extraites du psaultier lesquelles David disoit es tribulations et adunsitez qui luy survenoyent et lesquelles Dieu avoit aggreables et presentement les exaulsoit et encores feront qui icelles devotement diroit en ses necessitez. Oroison. »*

F. 127：悔悛の祈祷文①（挿絵）〈剣を差し出す天使に顔を向けて祈るダヴィデ王〉**"Domine non secundum peccata nostra facias nobis neque secundum iniquitates"**

F. 133：*« Oroison a dire devant le Sacrement. »*

F. 133v：（挿絵）①〈聖体を奉挙する司祭の背後で祈る黒衣のフィリップ善良公〉**"Mon tres debonnaire et tout puissant"**（図VI）

F. 140v：« Oroison quant on le recoit. »

F. 141：（挿絵）①〈聖体を拝領する黒衣のフィリップ善良公〉**"Tout puissant et misericors Dieu je viens maintenant"**

F. 143v：*« S'ensieut devote oraison a dire quant on a receu le corps Nostre Seigneur. »*

F. 144：（挿絵）①〈祭壇に向かって祈る黒衣のフィリップ善良公〉**"Je povre pecheur rens graces et laenges a ta superative largesse mon tres doulz sauveur Jhesu Crist."**

F. 148v：罫線つき空白のページ

F. 149r–v：*« Pape Innocent et Pape Boniface ont ottroye a tout ceulx qui diront ceste oroison iij c. jours de pardon. Et soit certains qui devotement la dira chascun jour acoustument, il verra en le fin de la maladie de sa mort la glorieuse Vierge Marie, qui luy sera aidans et confortans encontre les mauvais ennemis d'enfer. Et est ceste oroison nommee Obsecro, laquelle est translatee en françois. »*

F. 150：贖宥と臨終に際し聖母の出迎えが得られる俗語による祈祷（挿絵）①〈聖母の戴冠〉**"Je te prie Dame sainte Marie mere de Dieu pleine de pitie."**

F. 158：（挿絵）③〈聖人たちに囲まれた恩寵の座〉**"Salvator Mundi salva nos omnes sancta dei genetrix virgo semper Maria"**

Ff. 160v–161：*« Quiconques dira tous les jours de l'an .xv. Pater Noster et .xv. Ave Maria, il dira en ung an autant de fois Pater Noster et Ave Maria que Nostre Seigneur Jhesu Crist eut de playes en son precieux corps c'est a savoir v. mil. cccc. lxxv. Cy apres s'en suit l'oroison que on doit dire apres le Pater Noster et Ave Maria. Oroison. »*

F. 161v：日常の栄唱と聖母祝詞の後に唱える俗語による祈祷文（挿絵）③〈キリストの笞打ち〉**"Seigneur Jhesu Crist, filz de Dieu vivant je te presente"**

Ff. 163v–164：教皇ボニファティウス 6 世がフランス王フィリップに授け、聖体を拝領後に唱えたものに 2 千年の贖宥を認めた祈祷文　*«Le pape Boniface VIe ottroya aux prieres de Philippe roy de France et donna a tous vrais confes et repentans qui devotement diront ceste oroison apres la levation du corps Nostre Seigneur Jhesu Crist, deux mil ans de pardons, lequelx il conferma par*

ses bulles. S'ensuit donc la tres devote oroison a Nostre Seigneur Jhesu Crist. Oroison. »

F. 164v：聖体後に唱える俗語による祈祷文（挿絵）③〈磔刑〉**"Sire Jhesu Crist qui a prins ceste tres sacree char ou ventre de la tres glorieuse vierge Marie"**（図Ⅴ）

F. 173：（挿絵）*〈聖母の戴冠〉 *« Ad vesperas beate virginis Marie. »*（図Ⅶ）

F. 240：**"Domine ne in fuore tuo argua me, neque in ira tua corripias me."**（挿絵）*〈キリストの再降臨・死者の復活〉

F. 271：（挿絵）*〈死者のための聖務日課〉**"Placebo" "Dilexi quoniam exaudiet Deus"**

F. 315v：（挿絵）*〈太陽を着て月を踏む聖母子〉*« Secuntur vij gaudia beate virginis Marie. »* **"Gaude flore virginali que honore speciali."**

Ff. 319–337：聖人請願

F. 319：三位一体の請願　**"De trinitate. Antiphona. »**

F. 319v：大天使ミカエルの請願　**"De sancto Michaele. Antiphona."**

F. 320v：洗礼者ヨハネの請願　**"De sancto Johanne Baptista. Antiphona."**

F. 321：福音書記者ヨハネの請願　**"De sancto Johanne Evangelista. Antiphona."**

F. 322：聖ペテロとパウロの請願　**"De sancto Petro et Paulo. Antiphona."**

F. 322v：聖アンデレの請願　**"De sancto Andrea. Antiphona."**

F. 323v：聖ヤコブの請願　**"De sancto Jacobo. Antiphona."**

F. 324v：聖ステファノの請願　**"De sancto Stephano. Antiphona."**

F. 325：聖クリストフォロスの請願　**"De sancto Christoforo. Antiphona."**

F. 327v：聖セバスティアヌスの請願　**"De sancto Sebastiano. Antiphona."**

F. 329v：聖ラウレンティウスの請願　**"De sancto Laurentio. Antiphona."**

F. 330v：聖アントニウスの請願　**"De sancto Antonio. Antiphona."**

F. 331v：聖マルティヌスの請願　**"De sancto Martino. Antiphona."**

F. 332：マグダラのマリアの請願　**"De Magdalena. Antiphona."**

F. 333v：聖カテリナの請願　**"De sancta Katherina. Antiphona."**

F. 334v：聖マルガレータの請願　**De sancta Margareta. Antiphona."**

F. 335v：聖アポロニアの請願　**"De sancta Appolonia. Antiphona."**

F. 337: 全聖人への請願　**"De omnibus sanctis. Antiphona."**

F. 337v : ベルナルドゥスの 7 編の祈祷文 *« Secuutur septem versiculi sancti Bernardii »* **"Illumina oculos meos neumque ob dormiam in morte"**

F. 342：*«Clemens papa quintus dedit remissionem negligentiarum in horis canonicis istam orationem sequentem devote legantibus in fine horarum oratio. »* **"Sancte et individue trinitati Jesu Cristi Crucifixe humanitati beate virgini"**

F. 342v：（下部欄外余白：後補　アンティフォナの聖句の欠落を補完）

Fols. 349v–350：［後補 : 第 2 の写字生］　聖トマス・アクィナスの請願（図 9）

F. 350v：罫線つき空白

F. 351：都詣での歌 *« S'ensieuvent les .xv. psaulmes avec leurs suffrages lesquelles doibvent dire per ordre aussi qu'il est cy apres mis. En lieu des heures Nostre Dame aus jors qu' on fait d'elle selon l'ordre et usage de saint Dominique. »* ④ 3 行高彩飾頭文字 **"Ad Dominum cum tribularer clamavi et erandunt me"**

F. 375：［後補：第 3 の写字生］俗人の死者のための祈祷

F. 376：［後補：第 3 の写字生］モーの聖フィアクリウスの祈祷文

F. 376v：［後補：第 3 の写字生］リエージュの聖フベルトゥスの祈祷

F. 377v–379：［後補：第 3 の写字生］聖ゲオルギウスの請願

F. 379v：［後補：第 4 の写字生］聖母への祈祷

注

A） この附録 1 は、バイエルン州立図書館デジタルライブラリーにおける閲覧に基づく。

B） ミュンヘン写本の後補の詳細は、続く【附録 2】を参照。

C） この箇所に掲載されるアンティフォナは、アレクサンドリアの聖女カタリナのものである。

D） 第 19 連が « Fac me cruce custodiri/ morte Christi prenumeri/ confoveri gratia » となっている。

【附録 2】『フィリップ善良公のいとも小さき祈祷書』（BSB, Gall. 40）後補

スラッシュ／は改行を、［ ］は文字ないし語の欠落または欠落への補足を意味する。
各祈祷文については、註を付してページ下部に解説をまとめた。

Ff. 1–2：聖バルバラの請願（図 1）
（イニシャル空白）[L]aus honor benedictio/ Salus gratiarum actio, sit/ nunc et perpetuo glorioso Dei/ filio, qui Barbarae hoc certamine/ in stadio digne pro merito/ in sui celi palatio celsti/ coronavit bravio[a]. Versus / Ora pro nobis. Respomsum. Ut digni, /Oremus. /［D］eus qui beatam / Barbaram in agnitione / sancte t［r］initatis / illuminasti et pro te / （f. 1v）flagella cilicium/Carceres furcas/ Lambades maleos /Gladios in super /Mortem presentem /Vincere fecisti /Itaque queso eius /Precibus et virtis［?］/Ex hac passione tua /Semper nos illumina/ et plaga et morbo/A mortis periculo/Et vite scandalo /（f. 2）a flamma infernali/ qua pre in eius/ devoravit nos/ libera. Ut cum vera/ confessione et sacrementi/ communione perduc/ nos ab hac vita/ ad gloriam sempiternam[b]/ Per Christum［ ］/

Ff. 2–3：聖ブラジウスの請願
de sancto Blasio/（イニシャル空白）［A］ve presul honestatis/ martir magne sanctitatis/ sancte Blasi vir laudande/ （f. 2v） orbe toto predicandae/ Qui das lapsis/ relevamen, et/ infirmis medicamen/ tu pro nobis intercede/ ut celstis nos mercede/ ditet deus cum beatis regno/ suae claritatis[c].Versus. / Ora pro nobis. /;/? ut roo?/ Deus qui fidelibus tuus/ per orationem beati Blasi atque/ martiris tui atque/ ponthificis cunctis/ （f. 3）eiusdem memoria facientibus/ do quicumque infinitate vel ad/ versitate fen nostr liberari/ concessisti, prima que, ut/ usiu eijs reliquias be[d]
Ff. 6v–7v：聖クィンティヌスの請願
（イニシャル空白）［E］gregie martir/ Dei Quintine/ sucsipe preces./ precare dominum pro/（f. 7）necessitatibus famulorum/ quos nimium/ conprimunt vincula/ delictorum/ Versus Ora/ pro nobis gloriose martir/ Quintine. Responsorium. Ut/ digni efficiamur[e]. Oremus. /（イニシャル空白）［ A ］ desto Domine supplicacionibus/ nostris, ut qui ex/ iniquitate nostre/ reos nos esse/（f. 7v）cognosciumus Beati /Quintini martyris/ tui intercessione/ liberemu per/ Christum[f].
F. 20v：「わが岩、主はほむべきかな」（詩篇 143：1–3）
Benedictus Dominus Deus/ meus qui docet ma/ nus meas ad proelium/ et digitos meos ad/ bellium/ Misericordia mea/ et regugium meum/ susceptor meus et/ liberator meus/ Protector meus et/ in ipso speravi qui/ subdit populum meum sub/ me
F. 143v：聖体拝領前の祈祷
“（イニシャル空白）［D］omine non sum dignus ut/ intres sub tectum meum./ Sed tantum dic

verbo et/ sanabitur anima mea[g)]."

F. 328：（後補・上書き）聖セバスティアヌス応唱 "Ut mereamur pestem epidemie, illesi pertransrre et permissiones Christi obtinere."

F. 342v：聖体拝領後の主への祈り：アンティフォナ後半（欠落部分）

（校正記号）" Domini esitani protege/ Domine. Et angeli tui/ custodiant muros eius".

Ff. 349v–350：聖トマス・アクィナスの請願

"（イニシャル空白）[ ] eo de sancto Thoma de Aquino. O Thoma laus et gloria predicatorum ordinis nos transfer ad celestia professor sacri numiniis, ora pro nobis beate Thoma, ut dig', efficiamus purissionibus Cristi. [D]eus /oratio/ qui ecclesiam tuam mira beati Thome confessoris tui erudicione clarificatas et sancta operatione fecundas, tribue nobis quesumus et que docuit intellectam conspicere et que egit immitatione complere. Per Cristum"

F. 375rv：死者のための祈祷

F. 375：俗人の死者のための祈祷（イニシャル空白）"[O]mnipotens/ sempiterne Deus/ cui nunquam sine/ spe misericordiæ supplicatur/ propiciare animæ/ famuli tui sacerdotis, ut/ qui de hac vita/ in tui nominis/ confessione decessit/ sanctorum tuorum/ numero facias/ aggregari[h)]. Qui ben/ turuses

F. 375v：（イニシャル空白）"[I]ste sanctus pro/ lege Dei sui certavit/ usque ad mortem et/ a verbis impiorum/ non timunt fun datus/ enim erat supra/ firmam petram[i)]/ Versus. Justus g manbit/ sicut lilium. Responsus. Et/ ante Dominun. Oremus.

F. 376：モーの聖フィアクリウスの祈祷

（イニシャル空白）"[M]isericordiam/ tuam quaesumus Domine/ interveniente/ Beato Fiacro confessor/ tuo clementer/ impende, et nobis/ peccatoribus ipsius/ propiciare suffra/–giis. Per Christum[j)].

F. 376v：リエージュの聖フベルトゥスの祈祷

F. 376v–（イニシャル空白）"[L]audemus Deum/ qui beatum et vere/ laudabilem hubertum/ suorum collegio contifi–/ cavit sanctorum, quo/ per laudes tanti/ presulis eternam/ obtineamus commeo/ racioneris, Christus/ Ora pro nobis beate/ pater Huberte/ Ut digni efficam[k)] /（f. 377）promissione Christi/（イニシャル空白）"[O]mnipotens sempiterne Deus qui quanto/ nos infirmiores/ esse previdisti/ tanto nos beati/ Huberti confesseris/ tui atque pontificis/ copoisiore mium ?/ da ut sub eius/（f. 377v）patrocinio con–/ stituti nec ab/ dicamur viciis/ ne succumbamur/ adversis, per/ Christum.

F. 377v–379：聖ゲオルギウスの請願

F. 377v: De sancto Georgio/（イニシャル空白）"[F]ideles hic attendite/ Christi sanctum diligite/ mentibus letis dicite/ Georgi, martir inclite/ Te deret laus et gloria/ predo tatum milicia/（f. 378）per quem puella regia/ existens in tristicia coram/ dracone pessimo te corde/

rogans intimo salvata/ est, et o se reddidit/ altission cum multis/ infidelibus fac ergo sic/ in civibus Tu nos/ reddas sordibus Ut simul/ cum leticia tecum simus/ in gloria nostraque reddant/ （f. 378v）labia laude Christum/ cum gratia[l]. Versus. Ora pro/ bibus beate miles/ Georgi et martir/ Christi. Responsum. Ut Digno/ Oremus./（イニシャル空白）“［O］minipotens sempi–/terne Deus qui devota precam/ cium voces benignus/ exaudis, maiestatem/ tuam supplices/ （f. 389）exoramus ut sicut/ in honore beati/ et floriosi martiris/ tui Georgi draconem/ a puella superare/ voluisti. Ita eiusdem/ intercessone hostes/ nostros? visibiles et/ invisibiles ne nobis/ nocere valeant a/ nobis separari concedas/ per Christum[m].

F. 379v：「聖母への祈祷」

Nos cum prole pia bene–/ dicat Virgo Maria/ / Stella Maria maris/ succurre piissima nobis/ / Jhesus Marie filius sit/ nobis clemens et Christus/ / In omniam tribulationem et/ angustia subveniant/ nobis pia Virgo Maria[n]/

注

a） 以上、この聖バルバラのアンティフォナは、1898 年刊 *Analecta hymnica* XXVIII, p. 286, no. 29 の第 1 アンティフォナに一致する。その典拠は、ケルンのカルトッジョ会修道会図書館蔵の 15 世紀の祈祷書（写本番号 W.kl. 8°28）収録の聖バルバラの式文断片であり、その起源は不明とされている。なお、同祈祷書写本が第 2 次世界大戦の戦禍を免れたのかは明らかでない。

b） 同聖バルバラの祈祷文は、1788 年フォリーニョ刊サヴィオ・マリーニ編纂聖バルバラ記念祭集成 *Memoria di S. Barbara vergine e martire di scandriglia detta di Nicomedia protretricce principale della città e dicesi di Rieti, raccolte ed esaminate da*［…］より pp. 146–147 掲載の祈祷文とほぼ一致する。この他、複数の 16 世紀の写本および刊本においてミュンヘン写本と若干語句が異なるヴァージョンが確認された。これらとともに、ミュンヘン写本と同一の祈祷文の存在についても、今後調査のうえ整理をして研究報告書で公表する予定である。（以上、2020 年 10 月 25 日閲覧）。

c） 以上、聖ブラジウス祭アンティフォナ。Cantus ID: a 00260.
Cantus : A Database for Latin Ecclesiastical Chant– Inventories of Chant Sources
URL : http://cantus.uwaterloo.ca/

d） 以上、聖歌データベースでは未確認。アウグスブルク州・市立図書館、ms. 8°150, f. Cf. Katalog der Oktavhandschriften, etc.

e） 1774 年刊ノワヨン司教クロプト＝ド＝ボーザック編『ノワヨン教区サン＝カンタン使用式聖務日課書秋季巻』*Brevarium noviomense,*［…］*ad usum regalis ecclesiae S. Quintini, pars autumnais*, p. 627「聖クィンティヌス、ウィクトリクス、カッシアヌス請願」参照。

f） 以上、グレゴリウスのミサ典書、聖人共通聖務日課より殉教聖人の朝課祈祷文と一致する Deshusses（1988）, p. 269, no. 294, 3209 参照。

g）「マタイによる福音書」8：8、百人卒長の言葉より。司祭から聖体を拝領する直前に信徒が三度唱える。Ff. 141 ～ 143v の、俗語による拝領に際して唱える祈祷文を補完するのは明らかである。

h） 西欧各地のミサ典書等への収録が散発的に確認できるが、Paxton, 2002、2013 によれば、最古の記載はヴァティカン図書館蔵『ゲラシウス・ミサ典書』（BAV Reg. 316）にさかのぼる。同ミサ典書ですでに俗人の追悼のための祈祷文である。

i） Cantus ID 003434。同データベースでは、約 190 の用例が確認できる。最古はドイツ、プリュム修道院由来の 9 世紀の写本で、以降 16 世紀までハンガリー、イタリア、フランス等の作例がある。［URL: http://cantus.uwaterloo.ca/chant/374058］（2020 年 10 月 26 日閲覧）

j） 『フィリップ善良公の聖務日課書』（夏季巻、ベルギー王立図書館 KBR 9026）には、聖フィアクルの式文は収録されていない。Leroquais, 1929, t. 2, p. 225 参照。他方、善良公の大伯父フランス王シャルル 5 世が 1375 年頃に制作させた『シャルル 5 世の聖務日課書』（BnF Lat. 1052, f. 487）の第一祈祷文がほぼ同一である。なお、刊本では 17 世紀にルイ 14 世の財務相コルベール私用のために編纂された『コルベール聖務日課書』、サンクトラレ 8 月 30 日聖フィアクルの祭日に収録されている。Gambier–Parry, Vol. 2, p. 421 参照。

k） パリ、フィリップ・ピグシェ、1500 年刊『リエージュ使用式時禱書』f. 12v に聖フベルトゥスの祈祷として収録。オックスフォード大学ボドリアン図書館イクナブラ本オンラインカタログ、Bod–Inc Online H–155, *Horae ad usum Leodiensem* 参照。［http://incunables.bodleian.ox.ac.uk/record/H–155］（2020 年 10 月 27 日参照）。ミュンヘン写本以前に制作されたリエージュ使用式を含む典礼・パラ典礼写本の確認は、今後の課題である。

l） 以上、聖ゲオルギウス祭朝課アンティフォナ。

m）以上、聖ゲオルギウス祭朝課祈祷文。

n） 各 2 行からなる祈祷文が 4 編列挙されている。最初の 3 編は、種々の聖務日課で用いられる祝祷であることは判明した。最後のものも祝祷である可能性がある。ミュンヘン写本の後世の所有者による書き込みである可能性も含め、調査を継続したい。

図 I 左.　聖顔の画家〈キリストの聖顔〉ミュンヘン、バイエルン州立図書館、Cod. gall. 40, f. 3v （Bayerische Staatsbibliothek, München)

図 I 右.　祈祷文" Salve sancte facies » Cod. gall. 40, f. 4 （Bayerische Staatsbibliothek, München)

図Ⅱ．第１の画家〈悪魔を退治する大天使ミカエル、祈祷台の前で祈る善良公〉ミュンヘン、バイエルン州立図書館、Cod. Gall. 40, f. 22 （Bayerische Staatsbibliothek, München）

図Ⅲ．第１の画家〈受胎告知〉『フィリップ善良公のいとも小さき祈祷書』ミュンヘン、バイエルン州立図書館、Cod. Gall. 40, f. 38 （Bayerische Staatsbibliothek, München）

図Ⅳ．第 2 の画家〈最後の晩餐〉『フィリップ善良公のいとも小さき祈祷書』ミュンヘン、バイエルン州立図書館、Cod. Gall. 40, f. 81（Bayerische Staatsbibliothek, München）

図 V．第 3 の画家〈磔刑〉『フィリップ善良公のいとも小さき祈祷書』ミュンヘン、バイエルン州立図書館、Cod. gall. 40, f. 164v（Bayerische Staatsbibliothek, München）

図 VI 左. 第 1 の画家〈聖体奉挙を見守るフィリップ善良公〉『フィリップ善良公のいとも小さき祈禱書』ミュンヘン、バイエルン州立図書館、Cod. gall. 40, f. 133v（Bayerische Staatsbibliothek, München）

図 VI 右. 祈祷文「聖体拝領に臨んで唱える祈祷文 」 Cod. gall. 40, f. 134（Bayerische Staatsbibliothek, München）

図Ⅶ. ウィレム・ヴレラント（工房）〈最後の審判〉『フィリップ善良公のいとも小さき祈祷書』ミュンヘン、バイエルン州立図書館、Cod. gall. 40, f. 240（Bayerische Staatsbibliothek, München）

図 1. 後補「聖バルバラの請願」『フィリップ善良公のいとも小さき祈祷書』ミュンヘン、バイエルン州立図書館、Cod. gall. 40, f. 1（Bayerische Staatsbibliothek, München）

図 2. 第 1 の画家〈マリアのエリザベツ訪問〉『フィリップ善良公のいとも小さき祈祷書』ミュンヘン、バイエルン州立図書館、Cod. gall. 40, f. 42（Bayerische Staatsbibliothek, München）

図 3. 第 1 の画家〈恩寵の座〉『フィリップ善良公のいとも小さき祈祷書』ミュンヘン、バイエルン州立図書館、Cod. gall. 40, f. 58（Bayerische Staatsbibliothek, München）

図 4. 第 1 の画家〈聖バルバラ〉『フィリップ善良公のいとも小さき祈祷書』ミュンヘン、バイエルン州立図書館、Cod. gall. 40, f. 70v（Bayerische Staatsbibliothek, München）

図 5.　第 2 の画家〈磔刑；骰子でキリストの衣服を賭ける兵士〉『フィリップ善良公のいとも小さき祈祷書』ミュンヘン、バイエルン州立図書館、Cod. gall. 40, f. 94（Bayerische Staatsbibliothek, München）

図 6.　第 1 の画家 テクスト頁：2 行高彩飾頭文字と栞状欄外装飾、1 行高彩飾頭文字『フィリップ善良公のいとも小さき祈祷書』ミュンヘン、バイエルン州立図書館、Cod. gall. 40, f. 35v（Bayerische Staatsbibliothek, München）

図 7.　〈3 行高彩飾頭文字 “A”〉「都詣での歌：詩篇 119」『フィリップ善良公のいとも小さき祈祷書』ミュンヘン、バイエルン州立図書館、Cod. gall. 40, f. 351v（Bayerische Staatsbibliothek, München）

図 8.　後補テクスト「わが岩、主はほむべきかな」『フィリップ善良公のいとも小さき祈祷書』ミュンヘン、バイエルン州立図書館、Cod. gall. 40, f. 20v（Bayerische Staatsbibliothek, München）

図 9. 後補テクスト「トマス・アクィナスの請願」『フィリップ善良公のいとも小さき祈祷書』ミュンヘン、バイエルン州立図書館、Cod. gall. 40, f. 349v（Bayerische Staatsbibliothek, München）

図 10. デュノワの画家〈淫欲の悪徳〉「悔悛詩篇 129」『デュノワの時禱書』大英図書館、MS Yates Thompson 3, f. 172v （ British Library）

図 11. ブシコーの画家〈マリアのエリザベツ訪問〉1408 頃『ブシコーの時禱書』ジャクマール＝アンドレ美術館、ms. 2, f. 67v

図 12. デュノワの画家〈恩寵の座；ダヴィデとバト・シェバ〉1445 年頃『パリ使用式時禱書』フランス国立図書館、BnF Lat. 1176, f. 186（Bibliothèque nationale de France）

図 13.　デュノワの画家〈聖母の戴冠〉1445–1450 頃『ジュヴネル＝デ＝ジュルサンの時禱書』フランス国立図書館、BnF NAL 3226, f. 32v（Bibliothèque nationale de France）

図 14.　ミュンヘン黄金伝説の画家〈恩寵の座〉1440 年代『パリ使用式時禱書』大英図書館、MS Egerton 2019, f. 203（The British Library）

図 15.　ジャン・ロラン 2 世の画家〈磔刑〉1450 年代前半、『ジャン・ロランのミサ典書』リヨン市立図書館、ms. 517, f. 183v（Bibliothèque municipale de Lyon）

図 16.　ダヴィッド・オベール筆写、1462、アウグスティヌス著『フランス語訳論集』スペイン国立図書館、MS Vitr. 25/2 f. 2v（部分）